



Title	第7章 接触・交流と社会関係 : 各地域の比較検討から見えてくるもの
Author(s)	小野寺, 理佳
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 137-175
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61413
Type	departmental bulletin paper
File Information	700_ch7.pdf



第7章 接触・交流と社会関係

——各地域の比較検討から見えてくるもの——

小野寺理佳 | 名寄市立大学保健福祉学部教授

はじめに

本章では、これまで道内各地域における調査研究から明らかにされてきた地域住民とアイヌの人々との交流状況を、「地域毎の特徴はどういったものか」「地域をこえて共通する状況とはなにか」といった点からあらためて検討する。以下、4部構成とする。第1節において各地域の交流状況の全体像を簡単に描いてから、第2節では生活史における交流を振り返り、続く第3節では現在の生活における交流を見る。最後に、第4節では親密な交流としての結婚に注目する。

このとき、いずれの地域においても、地域住民のなかには、いわゆるアイヌ系住民（アイヌの血筋の者やアイヌと親密な間柄にあると判断される者）が含まれる。彼らも地域の一員であることはたしかだが、その交流状況に関しては、家族や親族といった私的なつながりを基盤とする交流が主であり、交流を盛んにすると考えられる諸条件（たとえば、地域の自治会活動への積極的な参加姿勢）によって規定される部分は相対的に小さいことがこれまで明らかにされてきた。したがって、本章では検討対象を和人参民に限定する。

使用するデータは、新ひだか、伊達、白糠の3地域についてはアンケート調査とインタビュー、札幌とむかわの2地域についてはアンケート調査から得られたものである。表は各地域の調査結果を和人参民について再集計・再整理したものである。分析をするにあたっては、交流の内容が年代によって大きく異なることが予想されることから、住民を3世代、すなわち青年層（20～30代）、壮年層（40～50代）、老年層（60代～）にわけている。

第1節 各地域の交流の全体像

まず、各地域における交流状況の全体像を把握しよう（表7-1）。世代別に交流有（「よくある」「たまにある」の合計）の数値を確認すると、新ひだかでは、青年層29.4%、壮年層56.9%、老年層62.8%、伊達では、青年層4.7%、壮年層10.8%、老年層19.8%、白糠では、青年層10.2%、壮年層38.9%、老年層35.4%、むかわでは、青年層29.0%、壮年層50.9%、老年層67.2%、札幌では、青年層3.1%、壮年層2.2%、老年層3.6%である。世代毎にまとめると、青年層については、新ひだかとむかわでは3割弱、白糠では約1割、伊達と札幌では5%に届かない。壮年層については、新ひだかとむかわでは5割超、白糠では4割弱、伊達では約1割、札幌では5%に達しない。老年層については、新ひだかとむかわでは6割超、白糠では3割超、伊達では2割弱、札幌では5%未満となる。

一覧して、指摘できる点は2つある。1つは、交流がより盛んに行われているのは、新ひだかとむかわ、白糠、伊達、札幌、の順であり、札幌における交流がとくに低調であることである。アイヌ集住地と非・集住地、郡部と大都市圏、そしてアイヌ集住地の間でも、交流頻度には大きな違い

があることがわかる。2つ目は、各地域共通して、おおむね上の世代になるほど交流有の比率が高まる傾向が認められ、地域住民としての活動を担っているのは主に老年層であることである。この交流頻度に見られる世代差は、ライフスタイルの変化によるものと考えられる。交流の内容に着目してライフスタイルの変化を描いてみると、青年層には独身者の割合が高く、学業や仕事など地域にあまり関与しない生活をおくる者が他の年代に比して多いが、壮年層では職場の付き合いが中心となりつつも、家族を持つことで地域での付き合いを持つ機会が増え、老年層になると退職世代であることから近所付き合いの比重が高まってくる、ということになろう。したがって、交流内容としては、青年層と壮年層では「職場付き合い」、老年層では「近所付き合い」が主なところとなる。以下においては、こうした全体のスケッチをふまえ、交流状況を整理する。

表7-1 各地域における交流状況 度数 (%)

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	合計
新ひだか	青年	13 (15.3)	12 (14.1)	16 (18.8)	44 (51.8)	85 (100.0)
	壮年	45 (24.9)	58 (32.0)	30 (16.6)	48 (26.5)	181 (100.0)
	老年	56 (25.5)	82 (37.3)	42 (19.1)	40 (18.2)	220 (100.0)
伊達	青年	1 (1.2)	3 (3.5)	10 (11.8)	71 (83.5)	85 (100.0)
	壮年	9 (4.4)	13 (6.4)	34 (16.7)	147 (72.4)	203 (100.0)
	老年	21 (7.2)	37 (12.6)	43 (14.7)	192 (65.5)	293 (100.0)
白糠	青年	2 (4.1)	3 (6.1)	8 (16.3)	36 (73.5)	49 (100.0)
	壮年	18 (13.7)	33 (25.2)	29 (22.1)	51 (38.9)	131 (100.0)
	老年	25 (11.1)	55 (24.3)	62 (27.4)	84 (37.2)	226 (100.0)
むかわ	青年	12 (17.4)	8 (11.6)	13 (18.8)	36 (52.2)	69 (100.0)
	壮年	30 (19.1)	50 (31.8)	28 (17.8)	49 (31.2)	157 (100.0)
	老年	69 (29.7)	87 (37.5)	44 (19.0)	32 (13.8)	232 (100.0)
札幌	青年	0 (0.0)	4 (3.1)	6 (4.6)	121 (92.4)	131 (100.0)
	壮年	1 (0.4)	4 (1.8)	11 (5.0)	205 (92.8)	221 (100.0)
	老年	1 (0.5)	6 (3.1)	10 (5.2)	176 (91.2)	193 (100.0)

* 不明・無回答を除く。以下、全表において同じ。

第2節 生活史における交流

本節では、これまでの生活史において、地域住民がアイヌの人々とどのように出会い関わってきたのか、そして、その経験をどのように受けとめてきたのかを見ていく。インタビューデータ（新ひだか、伊達、白糠）を3つの交流場面（子どもの頃の生活場面、学校場面、その後の生活場面）にわけて整理したものが、表7-2、表7-3、表7-4である。上に示したように、この3地域における現在の交流は、新ひだか、白糠、伊達の順に多い。これまでの生活を振り返ったとき、過去の交流経験もこの順に盛んなのだろうか。

第1項 子どもの頃の生活場面

はじめに、子どもの頃の生活場面を見てみよう。まず、新ひだかについて見る。表7-2によると、新ひだかにおいては、アイヌの人々を、単なる遠景ではなく、日常生活のなかで直接関わりをもった相手として語る言葉が多く聞かれる。語っているのは壮年以上の世代である。そこに描かれているのは、近隣住民同士助け合わなければ生活や仕事が成り立たない人々にとって、差別意識の有無にかかわらず、アイヌの人々との付き合いは必要なものであり当然のことであったという世界

である。つまり、子どもは親のライフスタイルや都合によってもたらされた交流に否応なく巻き込まれ、そのなかで自分なりの交流のしかたを模索しながら濃密な感情をもたざるを得なかったのである。彼らはアイヌの人々と家族ぐるみの付き合いをし（させられ）、時にはアイヌの人々の世話にもなり、子ども同士の遊びでは何の差別もなく仲良く遊ぶという経験をしてきている。食料の差し入れをしてもらったこと（「魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でもよくわからなかったけど、ただ食べ物もらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います」壮年女性）、赤ん坊だった自分の子守をしてもらったこと（「親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出ていくわけです」老年男性）、農作業や漁業の手伝いに行ったこと（「私達もむこう田植えだとか稲刈りに手伝いにいくようになって、秋にするめとれるようになるとむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういうお付き合いはずっとしていたんですよ」老年女性）等の記憶が語られる。

表7-2 生活史（1）

		子どもの頃
新ひだか	青年	—
	壮年	◆（交流は）あった。どっちかというと一緒に遊んでいた程度ですからね。子どもの頃ですから、喧嘩をしたりもしましたが、それなりに付き合っていましたね。（印象に残っているのは）やっぱり、小学校の頃かな、アイヌの人の家に遊びに行ったことがあったよね。その時にはやっぱり、今あんまり覚えていないけど、宝剣とか、漆器類があったのは記憶にありますね。その時代でしたから、確かに仲良くはしていましたけれど、やっぱりアイヌ民族と和人の関係が、やっぱり、ちょっと両親からと言われていたものでね。その中で、遊びに行った時に、そういうのがあったなというふうに頭の中には残っていますね。（和人との付き合いとの違いはあったか）そうですね。（男性） ◆仲良くですね。私は山のほうに住んでいましたが、下のほうの海側に～さんという人が住んでいたんだけど、とても明るくて足の早い人で、その人とけっこう付き合っていたり、広く浅く。魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でもよくわからなかったけど、ただ食べ物をもらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います。親もそうですね。なんぼか。魚を持ってきてくれたりして、普通に接していました。でも、親は年をとっているから、わかってたんでしょうね、子どもよりは。アイヌという偏見はけっこうあったみたい。蔭ではなんか言っていたような気がするんですよ。（女性）
	老年	◆ただ私の記憶にありますのが、杵臼にいた時には私もまだ3歳か4歳かと思いますが、三角の小さいチセ、家、廊下があって、そこに爺ちゃん、エカシですよ。親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出て行くわけですが、その時の爺さんの名前は親から聞いています。ヤキネクルという名前でした。結局、オンネクル（年寄り）、おわかりだと思いますがお年寄りなものですから、そこに住んでいて仕事も何もししていない。せいぜい子どものお守りぐらいで。ここに抱かされた記憶があるんですが、どうも髭が邪魔だったという記憶があります。（男性） ◆うちが借家をやっていた時に、そこで富澤に住んでいましたから、そして、（家を貸していたアイヌの人は）ある程度親が年齢になってきて、富澤に帰って一緒に暮らすようになって、こっちにいないから私達もむこう田植えだとか稲刈りに手伝いにいくようになって、秋にするめ取れるようになるとむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういうお付き合いはずっとしていたんですよ。私が、「どうしてあすこの家とお付き合いするの」と聞いたんですって。結局小さい頃、一緒に借家に住んでいたのを知らなかったのね。「どうして、何かあったらあすこに持って行きなさい」と言われるのかな。田植ったら「行きなさい」。稲刈りしたら「行きなさい」。そうしたら、親からこういうわけで、あすこずっと2軒借家だったんだ。アイヌの人たちが新婚時代に、ずっと入っていて、親が年齢になったので向こうへ行ったら田んぼを作ったりするようになったんだって。それを聞いたんですよ。あまりにも何か一緒にいなくても、行き来をしていたもんですから。で、自分の母親はここの人じゃないですから。父親はここで多分生まれ育っていますが、母親は新潟から来ているものですからね。…仲良く付き合っていたこともあるし、喧嘩もして、やっぱり喧嘩もして行ったり来たりしないこともあったし。（アイヌの子と和人の子が仲良くないということは）いや、そうでもなかったですけど。でもやっぱり、遊んでいるとね、やっぱり辺りの人がすごい言い方をして、何でもこんな差別するののかと思うこともけっこうありましたけど。自分たちはそういうあれが全然なかったですから。あの、浜って、浜の人って特にうるさい。すごく人種差別をする。そして、言葉がきたないでしょ。（和人の子との付き合い方とアイヌの子との付き合い方が違うということは）別にそんな。同じ。（女性）

伊達	青年	◆アイヌの人との交流もなかった。（男性） ◆母親は本州の出身なので、アイヌに対する差別的な考え方は一切しなかった。生活するなかでは、母親と同じ考え方をしていた。父親や父方祖父母はアイヌに対する差別的な見方をしており、アイヌの人に対して「あちらさん」という言い方をしていた。アイヌの人は近くに住んでいて交流はあったけれど、下にみているようなところがあって、子どもの時にそれがとても嫌だった。そういうふうにはしなかったし、したくないと思っていた。（女性）
	壮年	—
	老年	◆子どもの頃に近所にアイヌはいなかった。…自分が中学校、高校の頃は、身近にアイヌの人はおらず会うこともなかった。アイヌの人たちは一般家庭の家に住んでいる人は少なく、トッカリショなど室蘭の観光道路をずっと下りて行った海の近くにひと部落があって、その中の家に住んでいたように思う。（男性） ◆自分の住んでいる辺りは、子どもの頃からアイヌの人たちが住んでいた。子どもの時には、アイヌの人は身体的な特徴として体毛が濃かったり、体臭があったりすることは全然気にしなかったけれど、20歳くらいになってくると、だんだんそういうことを感じるようになり、「あの人はアイヌなんだよ」というような言い方を耳にするようになった。…子どもの頃は、まわりはほとんどが亶理からの開拓で入った農家なので、そういうことを言う人たちはいなかった。中学や高校へ行くようになると商売をしている人や勤め人などいろいろな人たちと交わるようになり、そういう情報が入って来るようになった。それまでは、全くそういう情報はなかった。この辺りは、今でこそ宅地化が進んでいろいろな人が住んでいるけれど、子どもの頃は、農家ばかりなので、そういう言葉は聞かなかったし、知らなかった。違和感なく育った。…（アイヌを差別するような）地区ではなく、まわりは農家ばかりの環境で育ったので、アイヌの人に対してあまり違う目で見るということはなかったのかもしれない。（女性） ◆友だちの親がアイヌで漁師さんだと、魚を持ってきてくれた。アイヌで農家に嫁いだ人がいて、昔のでんぶんの塊をもってきて、ストーブの上で焼きながら、みんなで砂糖醤油をつけて食べたりした。兄の友だちにもそういう友だちがいて遊びにきていた。家族ぐるみでアイヌの人たちとも交流があった。隔てがなく、雪が降ったりすると、「泊まって行っていいよ」、「帰れなくなったら明日朝一緒に学校へまっすぐ行けばいいよ」という感じで、アイヌの友だちもみんな家に泊まって楽しく過ごしていた（今でも、そういう友だちで東京へ行った人などを送ったり送られたり、交流が続いている）。（女性）
白糠	青年	◆（周りの大人たちが誰がアイヌだとか言っていることは）まあ、知ってたような気がしますね。まあ、だからどうしたみたいな感じなんですけどね。（男性） ◆わかんないですね。そういう話、普段しないですからね。誰がアイヌだとか、そう言っただけ。（差別的なことを言う人は）子どもの方は多かったかな。そういうのがね、大体小さい子の方が…あのう、何て言うんだ…よく分かんないけどさ、そういう差別的な言葉を言う子。（男性） ◆何か小学校のころに「この人の家はアイヌだからね」みたいなことは聞いたことがあるんですけど、それは子どもの言うことなんで、ちょっと本当かどうか分からないみたいな。（女性）
	壮年	◆そこにいた頃は全然意識なかったんだよね。学校でもなんでも。…でも今考えてみると、例えばうちの実家とかにも、アイヌの人たちは出入りはしてた。普通、父親の友人とかでいたから。（男性） ◆うちの近所にはいなかった。ちょっと離れた地域には。だけど、昔、ずうっと山の近くのほうにアイヌの人が住んでいたんだと思うんですね。チロリン村と言っていた地域があったんですよ。別にそういう地名が付いているわけではないんですけど、チロリン村という名前を付けていたところがあって、そこにアイヌの人がいたような気がするんだよね。それから、そこがだんだん開発されて出てくるようになってから、町場に散ったみたいな感じで、その地域はなくなりましたけどね。（そういう人たちがいることを）知っていましたね。だけど、私と同世代はたぶんいなかったと思うんですね。だから、たぶんそこにいたんじゃないかという感じしか。（女性）
	老年	◆アイヌの人がいるということは親に聞いたことがあって、何かアイヌの人がものを売りに来たことがあるんだよね。当時、親はね、ああいう人の持ってきたものを触っちゃいけない、汚いからと言われたような記憶が何となく残っているね。（男性） ◆ごく普通に遊んでましたから。いたんだらうねえ。きっとね。3軒か4軒くらいその辺にいたんだと思うんだけど、純粋なアイヌかといったらやっぱり、混血なんだらうね、きっとね。（男性） ◆よそは分からないけれど、白糠で漁師をやっている親たちの年代って酒に飲まれる人が多くて、だからそういう部分で、さほど密な関係で友達になる（ことはなかった…著者注）…まあ阻害しなかったし（「迷惑をかけられるようなことはなかった」の意と思われる…著者注）、ただこっちから飛び込むというのは少なかったと思いますね。（男性）

* 紙幅の関係で典型的な回答に限定して掲げた。以下、インタビュー全表において同じ。

では、伊達はどうだろうか。子どもの頃近隣にアイヌの人々がいたことをあげる者はいるが、すべてが親しい交流の記憶として認識されているわけではない。この地域においても交流の記憶を具体的に語っているのは年長世代であるが、アイヌの人々の存在が一つの風景として語られる傾向にあるという点が新ひだかとは大いに異なるところである。「友だちの親がアイヌで漁師さんだと、魚を持ってきてくれた」(老年女性)という言葉のように、親しい付き合いがあったことを語る者は例外的である。「アイヌの人たちは一般家庭の家に住んでいる人は少なくて」(老年男性)、「自分の住んでいる辺りは、子どもの頃からアイヌの人たちが住んでいた。子どもの時には、アイヌの人は身体的な特徴として体毛が濃かったり、体臭があったりすることは全然気にしなかった」(老年男性)等、ほとんどが「アイヌの人々の存在と特徴を知っていること」あるいは「アイヌの人々を見たことがあること」を語るにとどまっている。つまり、アイヌの人々との間には一定の距離がかけられ、いわば対岸の風景として目撃されたり観察されたりしているのである。

最後に白糠について見る。現在は新ひだかに次いで交流有の比率が高い地域ではあるが、子どもの頃の生活場面におけるアイヌの人々との交流に関しては、新ひだかより伊達について語られるものに近い。というのも、アイヌの人々の存在を知ってはいたものの、親しく付き合ったという思い出を語る者はいないからである。世代毎に見ると、青年層には語るだけのものをもたない者が相対的に多く、「わかんないですね。そういう話、普段しないですからね」(青年男性)、「ちょっと本当かどうか分からないみたいな」(青年女性)のように心許ない発言が目立つ。この曖昧な語り口は、世代にかかわらず見られる傾向であり、このことは住民とアイヌの人々との交流の少なさ、アイヌの人々に対する関心の低さを示しているといえるだろう。そうしたなかで、より多くを語っているのが壮年層・老年層である点は、新ひだか、伊達と同様である。とはいえ、その年長世代も、自身が関わった具体的な交流のエピソードを語るわけではなく、アイヌの人々を見たことがある、話をきいたことがある、評判を知っているという内容の話をするにとどまる。「でも、今考えてみると、たとえばうちの実家とかにも、アイヌの人たちは出入りはしてた」(壮年男性)、「(そういう人たちがいることを)知っていましたね」(壮年女性)といった言葉が典型的なものである。

以上まとめると、新ひだかでは、好むと好まざるとに関係なく、住民とアイヌの人々との濃密な交流の機会が日常生活のあちこちにあり、一方、伊達と白糠においては、両者の距離が相対的に遠く、存在を認識しながらも互いの生活のなかに入り込むような付き合いには発展しないケースが多く見られた。このように、地域によって交流の内実は異なるが、共通することが2点ある。1点目は、青年層の発言が壮年層や老年層に比較して少ないことである。これは、若者の育った時代背景、つまり、多様性が当然であるとの認識が社会に根付きつつあり、アイヌの人々の存在が過去に比べれば特別視されなくなってきたことを示すものと考えられるが、だからこそその関心の低さを示すものともいえるだろう。これは、第2項「学校場面」、第3項「その後の生活場面」についても同様に指摘されることである。2点目は、子どもにとって、周囲の大人によるアイヌの人々への差別的な対応は強く印象づけられる出来事であったことである。子どもは大人の態度や言動をよく観察しており、アイヌの人々に対してどのような感情が向けられているのか、とりわけ否定的な感情には敏感であった。「でもやっぱり、遊んでいるとね、やっぱり辺りの人がすごい言い方をして、何でこんな差別するのかと思うこともけっこうありましたけどね」(新ひだか・老年女性)、「父親や父方祖父母はアイヌに対する差別的な見方をしており、アイヌの人に対して「あちらさん」という言い

方をしていた。アイヌの人は近くに住んでいて交流はあったけれど、下に見ているようなところがあって、子どもの時にそれがとても嫌だった。そういうふうにはしなかったし、したくないと思っていた」(伊達・青年女性)といった言葉がある。「差別」というものについての理解や知識の程度に違いはあったにしても、アイヌの人々に対する大人の差別的な態度を当たり前のものと感じなかった子どもは少なからず存在していたと推察される。

第2項 学校場面

次に、同年齢集団が共に長時間を過ごす場所である学校に注目し、学校場面における交流についての語りをまとめていこう(表7-3)。学校場面における交流についても、多くを語るのは年長の者たち、主に老年層であり、義務教育段階の学校生活の思い出があげられている。

新ひだかから順に見ていこう。この地域は、アイヌの子どもがクラスに占める比率が他の地域よりも相対的に高く、それゆえに、その数の多さを違和感として感じる者もたしかにいたようである。「学校に行っても「いや、どうして」って感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね」(老年女性)、「同級生の中にもけっこういましたよ。見るからにほんとと言っちゃ悪いですけど、独特ですよ。何人くらいいたのかな。60何人のクラスで10人かそこらくらいいたかな」(老年女性)といった言葉がある。しかしながら、クラス運営において「差別」と認識されるようなことがあったという話はなく、アイヌの同級生とは普通に交流していたというのが共通する回答である。無論、アイヌの人々に対して何らかの「違い」を感じていたとしても、その認識を自覚しながら普通に振る舞っていたということである。「常になんか認識はしていましたが。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人は持っていたと思います。だからと言って、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそういうことは一切なく、違うという認識は常に頭のなかにありましたね」(老年女性)という言葉がまさに当時の和人の子どもたちの心境をよく表している。加えて、アイヌのクラスメートの不登校問題にクラス全体で関わることによって、彼らが抱えているいじめや家庭問題に気づかされた経験を語る者(壮年女性)もあり、学校生活が、アイヌの人々について知り、考えるための貴重な契機を与えていたことは明らかである。

さて、アイヌの子どもと普通のクラスメートとして付き合っていたという趣旨の回答が多く見られるのは伊達も同様である。アイヌの血筋であることが積極的にクラスに知らされることはなかったにせよ、周囲はその事実を承知しており、しかしながら、その事実起因するいじめや差別はなかったというのである。「直接このひとは「アイヌですよ」と言われたり紹介されたりしたことはないけれど、アイヌの子孫という人はいた。それが別にどうということはない」(青年男性)、「その子たちがアイヌだというのはまわりもみんな知っていたが、違和感はなかった」(老年女性)といった言葉がある。ここで、伊達の状況を新ひだかと比較するとどうだろうか。新ひだかの学校生活においては、仲良く遊んだ思い出だけではなく、アイヌの人々が抱える家庭問題の一端にも触れるなどお互いに深く関わり合ったことがあげられている。アイヌの人々はあからさまに差別されることはないが常に異質な存在として意識せざるを得ない対象であり、交流が友好的に維持されるためには、常にこの意識を持ち続けることが必要であることが子ども自身にも自覚されていたといえる。さらには、親の差別的な態度がある場合などは、自身のスタンスがそれによって揺るがされる

こともあり、そのたびに自己確認しなければならない。それに比べると、伊達については、親の差別的な発言や態度にふれている発言はより少なく、学校における交流の態勢はより気楽な印象を与える。この気楽さとは、伊達の地域社会においてはアイヌの存在が新ひだかほど重要な関心事項とはなっていなかったことを意味するだろう。

では、白糠はどうだろうか。白糠の状況を見ると、伊達とほぼ同じと言ってよいだろう。どの世代においてもアイヌのクラスメートとは普通に付き合っていたという回答が多い。アイヌであることが積極的に伝えられることはないが、周囲はそれを知っており、差別やいじめなどはなく、他のクラスメートと同じように付き合っていたというものである。こうした内容の語りはとくに青年層に多く見られる。しかしながら、壮年層・老年層では、差別なく付き合っていた者と、差別に関わった者の両方がいる。自発的ではないにせよ、自分が差別に「加担」したという思いを語る言葉が聞かれたのは白糠だけである（このことは白糠の学校で差別的な行為が多く存在したということと同義ではない）。このとき、差別に関わるストーリーには2とおりあり、1つは差別が子どもたちのなかから自然発生的に生まれたというもの、もう1つはクラスのなかに教師が差別を持ち込んだことにより、自分も差別に巻き込まれたというものである。後者については、教師を批判する言葉として、「担任の先生がアイヌのことを、これは侮蔑だなあ。笑わすんだよね。「アイヌの屁臭いな。1里行っても臭い。2里行っても臭い。3里行って、鼻の頭をみたら糞がついていた」と、そういう話をするんだ」（老年男性）、「小学校の同級生いた時も何か先生の教台っていうのかな、あそこに座らされて、なして座らされたのか今でも覚えてないんだけどね。あの時の先生のある程度何かばかにしてたんだろうね、あんなことしてね」（老年男性）といった発言がある。

このように、3地域ともにアイヌのクラスメートとは「普通に」交流していたとの発言が多く見られるなかで、新ひだかでは、アイヌの子どもに対する教師の配慮やアイヌのクラスメートに対するクラス内の支援も思い出としてあげられており、学校生活における交流は他2地域に比して親密であった様子がうかがわれる。一方、白糠では、教師が主導した差別をめぐる苦々しい思い出、後味の悪い記憶があげられ、新ひだかとは対照的なエピソードとなっている。新ひだかでは、アイヌのクラスメートと一緒に学校生活をうまくやっていかなければならないという意識（覚悟、と言った方がいいかもしれない）が教師にあり、その意識が生徒に共有されたのに対し、白糠ではそういった意識が育つには至らない場合もあり、といて、伊達ほどには無関心で済ませるわけにはいかないという現実がこうした事態を生じさせてしまったのではないだろうか。

表7-3 生活史(2)

		学校
新ひだか	青年	—
	壮年	◆母はよく言うんだけど、あまりアイヌに対しては良く思っていなかったような感じは受けましたけどね。小さい頃は母親から「あんまり遊ぶんでないよ」と言われたことはありましたけどね。ただ、僕らの小学校中学校時代は子どもの数が多かったから、1クラスに50人ぐらいいましたから、その中には1割まではいませんけど、5人程度はいたかな、やっぱりそれなりには付き合いしましたけどね。…中学生の時は50クラスの中に5人くらい、高校に行くくと1人か2人くらい。やっぱりね、アイヌの人は当時、なかなか高校には行けなかったよね。(男性) ◆小学校からなんだけど。アイヌ部落ってというか、アイヌじゃない人もいるんだけど、アイヌが住む土地が決められていたの。そこに住んでいた同級生がいて、途中から学校に来なくなったの。家庭的なことなのか、学校でいじめられたからなのか。かなり濃い。みんなから軽視されていたのかわからないけど、私はそういうのも疎いから。いじめられたのか、家庭的にお父さんが飲んでいて嫌だったのか、学校に来たくなかったのかということ、学校の中でけっこう話し合ったことがあった。どうやって学校に連れてきたらいいのか。そういう問題があったことがあった。みんな順番、順番で担当を決めて、今日はあんたたちが迎えに行く番、今日はあんたたちが迎えに行く番。という、昔って、すごい、そういうのがあったんですよ。人を助けるというか、そういうのがあったの。みんなでなんとか学校へ連れて来ような、みたいな感じで。みんなで助けようみたいな感じで。でもやっぱり、学校に来なくて。何かがあるんだろうね。子どもだからわからないから。ただ行こうって誘うだけで、空振り。出てこないんだよね。結局、最終的に中学校には来ていたけれどね。中学校では来られるようになっていて。でも、けっこう休みがちだったね。(女性) ◆小学校の時は本当に純粋にアイヌという人は多分何人かいたと思うんです。そういう人達は何かあんまり仲良くした、うーん、でも私は全然関係なくお付き合いしたから、わからないんだよね。…家にも遊びに行きましたし。だから全然。親に止められたこともなかったから。結婚する時は、言われたから、何か差別はあったんだと思うけど、私がこう友達同士でつきあうのには言われたことはないです、親からはだめと。…やはり、先生にもよるんでしょうね。私達の小学校の時の先生は厳しかったです。仲間はずれば許されなかったから。だから、そういうのもあったんだろうなって。(女性)
	老年	◆(クラスのなかに)せいぜい1人か2人ですね。仲のいいというのはいなかったね。…やっぱり、今でいうけっこういじめられていたというのはあるね。僕らあんまりそういう中心的なあれではないから。結局、不登校になるでしょ。そうすると、我々年代が多いけど、ちゃんと1年行かないで、また1年生2回やるとか、その当時の学校というのがあちこちあったから。たとえばここは市街地の学校ですから、そばの通学区域内にいる人はこっちに来ないとならない。そういう意味では学校に来たり来なかったりとかいたよね、そういう人はね。(男性) ◆学校へ行っても「いや、どうして」っていう感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね。(女性) ◆クラスに何人かの方はアイヌでした。数人。クラスは30人から40人くらい。(アイヌの子だということは)その地区にいる人達はみなさんわかっていましたね。それまであまりにも普通にそういう人達がいるから、お隣にいたりとか、だから、いじめという感覚は全くなかったですね。もう(アイヌの人がいるのが)ごく普通でしたから、あたりまえだったの。…(クラスメートとの友達関係は)普通に。(印象に残っていることは)別がない。普通ですから。ただですね。常になんか認識はしていましたけど。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人は持っていたと思います。だからと言って、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそのようなことは一切なく、違うという認識はつねに頭のなかにありましたね。(女性) ◆同級生の中にもけっこういましたよ。見るからにほんとに言っちゃ悪いですけど、独特ですよ。何人くらいいたのかな。60何人のクラスで10人かそこくらいいたかな。いじめているふうもないし、私もそういう記憶もないし。まわりでもね、あんたがアイヌだからどうか、というような記憶は私のなかでは全然ないんですよ。意識はないし。いじめているふうも見たことないし。へたしたら今のほうががあるのかな、もしそうであれば。(女性)
伊達	青年	◆小学校にも中学校にも同級生や同じ年代にアイヌはいた。直接この人は「アイヌですよ」と言われたり紹介されたりしたことはないけれど、アイヌの子孫という人はいた。それが別にどうということはない。本人も「アイヌだ」と言うわけでもないし、まわりや先生も何か言うわけでもなかった。(男性)
	壮年	—
	老年	◆自分の時代にはアイヌに対する差別はなかった。同級生のなかにもアイヌはいたが、つきあっていし、全然アイヌに対する抵抗はなく差別する気持ちもなかった。「この人はアイヌだ」というふうに思ったこともなかった。(男性) ◆高校には有珠、豊浦、虻田から集まってきて入学したので、同級生にアイヌの友だちがいて交流があった。漁師の家だったので、遊びに行くと魚を食べさせてもらったことなどあった。つきあっていたアイヌの友だちとの交流でとくに印象に残っていることはなく、あまりアイヌということも意識しなかった。家に遊びに行った時に母親がすみ(入れ墨)を入

		れていたのを見た記憶はあるけれど、別に何か深く感じたこともなかった。とくに気になることはなかった。友達とは一緒に泳ぎに行ったりして遊んだ。有珠で行われていた行事には参加したことはない。高校まではアイヌの人と交流はなかった。高校卒業後も友だち関係が続いて、元気なうちは行ったり来たりした。（男性） ◆中学校時代に父の仕事の都合で有珠の中学校に通っていた時期があり、有珠の中学校ではクラスに何人かアイヌの人がいた。3人～4人くらいで、そんなにはいなかったと思う。その子たちがアイヌだというのはまわりもみんな知っていたが、違和感はなかった。みんな仲良くしていて、差別はなかった。そのうち1人とは今でもつきあいがあり、今も遊びに来る。（女性） ◆学校でクラスにアイヌはいた。普通に話して仲良くなっていた。遊びに行ったり来たりしていた。アイヌは顔が違う。この人外人かな。日本人じゃないし、何だろうと思った部分もあったけれど普通に話をしていた。東町はイタンキ浜があったしアイヌが多かった。全然嫌だと思わなかった。ただ体臭があった。体臭がきつかった。体臭のことは別にすれば、話していても話はあうし、いつも一緒に遊んでいた。（女性）
白糠	青年	◆小学校の本当、低学年くらいまでかな。俺らの時は。もう3、4年生くらいになったら、そういうの気にしなくなったみたいで。だから差別的なっていうのはほとんどないですね、こっちの人は。こっちに来てアイヌっていうのを知って、何だろうみたいな感じ。アイヌっていう言葉自体知らなかったから。白糠に来るまで。特に何かしてるっていうわけじゃないんですよ。あいつはアイヌだよっていうくらい。だからって何かしているわけじゃない。いじめがあるわけじゃない。みんなで仲良くやってたんじゃないかな。（男性） ◆「僕は違うよ」みたいな。自分の同じ歳の中の子は、そういう感じです。まあ、本当に見て分かる子は、あえては自分では言わないですけど。うん、正直、触れちゃいけないのかなっていう面もあります。だからあえて聞いてないっていうのもあって。世間体、差別、だったりそういうものもあるのかな。あんまり深く言ったら本人に悪いかなっていう感じ。（女性）
	壮年	◆もともと白糠の子たちは、やっぱり、そういうアイヌっていう人の部分では、差別じゃないんだろうけど、一部違う見方はしてた子もいたから。そういうの聞いて意識したっていうのはあるけど。でももちろん、友達にもアイヌの人はいたし。…だから変な話、あの人アイヌなんだよって言うような言葉も聞いたことあるから。そういうので、あっそうなんだっていう位の意識かな。（男性） ◆小学生のときは、私の同級生に〇〇とかという、名前を忘れたな、男の子がいたんですよ。その子は、みんなアイヌだと知っていたんですけど、全然差別しないで仲良く、私たちグループと一緒に遊んでいましたね。知っていたと思いますよ。みんな分かっていたけど、そんなばかにするような子じゃないし、すごくいい子だったんですよ。優しく、いい子で、みんな本当に仲良くしていましたね。（学校の中の差別は）なかったですね。私たちの年代というか、クラスの中ではそういうことは一切なかったですね。（女性）
	老年	◆ごく普通に関わってたと思うけど、中にはやっぱり「いじめ」というかね、やっぱり。顔が違うと言ったらおかしいけども、ある程度蔑んでるようなところはそのように接する人はいたよね。やっぱり食事というか昼休みの時とか、こんなことを言ったら失礼だけど、若干匂いが違うんだろうけれども、そのような感じで、子どもだからね、指を指したり、こづいたりはしていたんではないかという気はするね。（男性） ◆中学校になった時に、小学校がたくさんあったから中学校になった時に、アイヌ系の女の子が来たというのがあった。でもそんな差別というのはなかった。ただ、小学校4年生の時に、担任の先生がアイヌのことを、これは侮蔑だなあ。笑わすんだよね。「アイヌの屁臭いな。1里行っても臭い。2里行っても臭い。3里行って、鼻の頭を見たら糞（くそ）がついていた」と、そういう話をするんだ。ただ大人の人が差別だね。「あの、メノコどうしている？」とかいう、その「メノコ」というのが何なのか分からなかった。それはあったね。いじめとか差別というのは親が言うから、大人が言うから子どもが受け継ぐのさ。うん、でもいじめたとかないなあ。（男性） ◆小学校の同級生いた時も何か先生の教台っていうのかな、あそこに座らされて、なして座らされたのか今でも覚えてないんだけどね。あの時の先生もある程度何かばかにしてたんだろうね、あんなことしてね。小学校1年生、2年生、みんなの目の前に教台の上に座らせて、何かその子が悪いことしたのかとかまったく記憶がないんだけど。アイヌの人だけ。だから昭和36年ぐらいの話なんで、学校の先生らなおさらそういう風潮があったんでないですかね。あの頃学校の先生ったら「ははあ」っていうぐらい偉かったから。（男性） ◆男の子も女の子もいたんだ、で、女の子とはクラスが違うんだけど、帰るのがちょうど中間ぐらいまで一緒だから、学校帰りがね、だから一緒に帰って何のあれもなかったんだけど、やっぱり周りの友達が、ええ、何で、あの人のお母さんアイヌだよみたいに言われたのね、でも中学生の時は、アイヌで何が悪いのって、私はあの人のお母さんと、はっきり言って、もう顔にね、出てるから、別にどってことなく私は付き合ってたんだけど、友達にやっぱりそやって言われて、アイヌだよって。（女性）

第3項 その後の生活場面

続いて、子ども期以降の生活場面における交流を整理していく。新ひだかではどうだろうか。表7-4を見ると、人々が語るのは主に近所付き合いとしての交流である。彼らは近隣のアイヌの人々と、差別をすることなく、普通に付き合っていると語っている。このように、アイヌの人々と普通に交流できる条件・環境としては、個人的な友人関係が成立していることが最もプラスに働いている。「みんな毎日会っているからさ。若い頃から、ここの家を建てる前からここの自治会にはいたんですよ、僕」(壮年男性)、「アイヌの友達はあるの。一緒に買い物したり、お食事したりしているけど」(壮年女性)、「私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとお付き合いしていて」(老年女性)など、アイヌの人々との間に長期にわたる関係が育っている様子が語られるのである。近所付き合いの他には、少数ではあるが、仕事関係の付き合いがあげられている。それは建設業や林業の現場であり、ブルーカラーの業種においてアイヌの人々との交流頻度が高い傾向がある。「アイヌの人で建設会社を作っていて、うちあたり、燃料、ガソリンとか、そういうのを現場に運んで行ったり。そういう人が成功しているから、そういう人の会社の新年会に招待されたり、会社の運動会だからと行ったり」(老年男性)、「私はもともと山林関係の仕事もしていたことがございますので、その時に相当アイヌの人がたが作業に来ておりましたので、そういう関係上アイヌの人がたとお付き合いはするようになりましたね」(老年男性)といった言葉がある。この場合も、仕事をきっかけとして個人的なつながりができ、個人的なつながり(友人関係とまではいかずとも)が築かれると継続的な交流として定着するようである。もっとも、仕事関係の交流が近隣との交流のように現在まで確実に続いているかどうかは不明である。

これに対して、伊達における発言をながめると、現実として交流には至っていない場合の方が多い。それは、近隣にアイヌの人々が暮らすのを「見たことがある」「知っていた」という内容であり、彼らの存在を「風景」として描写するものである。子どもの頃の生活場面においても、伊達では、アイヌの人々が風景として語られる傾向が指摘されたが、その実態と変わらないといえる。しかし、なかには、交流をしている者も老年層には若干見受けられる。それは仕事を通じた付き合いであり、仕事をきっかけとして個人的なつながりができ、安定した関係が築かれたという記憶である。たとえば、「有珠に何人が現在も付き合っているひとはいる。…仕事や写真の経験を通じてアイヌの人と付き合っているから、アイヌの人とは近い関係にあり、特別にどうのという感覚ではない」(老年男性)、「海岸には漁師をしているアイヌが多く、船にも電気関係の仕事があるので、仕事でアイヌの人と関わるようになった。家に行って、食事をご馳走になったり、おばあちゃん、おじいちゃんと話をしたりすることもあった」(老年男性)といった言葉が聞かれる。ただ、それらの交流がすべて現在まで続いているわけではなく、一時期の交流として終わったものも含まれる。新ひだかのように、近隣にアイヌの人々が居住しており、個人的な友人関係に支えられた近所付き合いが成立しやすい環境がない以上、アイヌの人々と交流を持つ機会は限られる。伊達においては、仕事に関わる場面が交流のきっかけを提供する貴重な機会であったということである。

それでは、白糠はどうだろうか。白糠是新ひだかと伊達の間とでもいうべき状況である。アイヌの人々との近所付き合いは何件かあるが、新ひだかのように自治会や同級生のネットワークの一端としての広がりを持つものというより、偶然に始まったきわめて狭い範囲の交友として営まれる

ものである。それは、「ちょっと飲み友だちっていうんですか、たまたま私の行く店にご夫婦で来る人も、2人ともそうなんですよ」（老年女性）といった付き合いである。白糠では、むしろ、仕事上の付き合いについてさまざまな経験が語られており、仕事に関わる場面がアイヌの人々との交流のきっかけを与えてきたという点において伊達と類似している。ただし、壮年層・老年層では、漁業、教員、役場勤め、土木といった仕事に関わる付き合いをしてきた経験があげられているものの、漁業従事者を除いて現在はその職を退いており、アイヌの人々との関わりは過去の一時期のエピソードという位置づけである。したがって、この一時期の付き合いから個人的な友人関係に進展したケースは見当たらない。私的で親密な交流が成立しているのは、唯一、家業として漁業に従事する者であり、彼らは仕事仲間として家族ぐるみの交流を続けているということであった。

このように見てくると、新ひだかのように、個人的な交友関係と近隣の交流が重なりあうようなとき、住民とアイヌの人々との交流は長期的なものとなり得るが、近所付き合いが相対的に低調である伊達や白糠では、アイヌのクラスメートとの付き合いが卒業後盛んであるとも限らず、結果として、アイヌの人々との関わりが生まれるのはもっぱら仕事の場面になるということである。もちろん仕事場での交流も多様であり、職種によっては、そこから個人的な（あるいは家族としての）交友関係に発展する場合もあるが、多くは一時期あるいは退職までの限定的な交流である。

表7-4 生活史(3)

		子どもの頃以降
新ひだか	青年	—
	壮年	◆ここに家を建てたのも別にアイヌの人がいいとか悪いとかということもないし。この自治会の人は友達だから。お酒飲んで騒いだ時にアイヌだとかシャモだとかということはありませんが、そんな程度で、それを根に持ってということも別にありません。(自治会の催しなどが)あります。16日も敬老の日でおじいちゃん、おばあちゃんがけっこういるものですから、生活館に集まって、みなでお祝いをしました。50軒のうち、30軒くらいしか来ていなかったけれど、そのうちアイヌの軒数が4軒か5軒くらいは来ていましたから。別にここのうちの自治会ではそういうアイヌだとか和人とかという意識はないから、みんな毎日会っているからさ。若い頃から、ここの家を建てる前からここの自治会にはいたんですよ、僕。そうなんだけど、それで町に家を建てようかと思ったけれど、ここ安く売ってあげるから、ここで家を建ててよ、となって、それで。別にアイヌだからどうだこうだということはいっさいないですね。(男性) ◆アイヌの友達はあるの。一緒に買い物したり、お食事したりしているけど、あらそうおっという感じの人もいるんだよね。厚賀の一緒に働いていた人に「疎いね」って私は言われるんだよね。「どこが」って言うんだけど。年を取ったらわからないんだよね。髪も白いし、そんなふうに見えないんだけど。でも、まわり近所を見たら、ぐるっと、アイヌはいるんですよ。でも、あんまり、そういうことを気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおびらに言えないんだよね。気にしている人もいるし。どこまで、そのところはデリケートな部分だから、言えないんだよね。どこまで、どうやって言っているのかっていうのがね。となり近所だし。(女性)
	老年	◆アイヌの人で建設会社を作っていて、うちあたり、燃料、ガソリンとか、そういうのを現場に運んで行ったり。そういう人が成功しているから、そういう人の会社の新年会に招待されたり、会社の運動会だからと行ったり。選挙ではその人が応援している国会議員を頼むと言われたり。たまに晩一杯飲みに行ったりすると、けっこう従業員でいたり。純粹ではないけど、混血だったり。あとは、うちで使っているから。選挙幹部で親戚の人がいたり。この辺ならごく普通ですね。日常。好んでも好まなくても。油入れに来たとか魚買いに来たとか。町内会もあるし。あんまり気になるようなことはないですけどね。(男性) ◆アイヌの人と一緒にになったのは新冠町〇〇に来て、初めて子どもの中にいましたね。クラスに何人もいない。学校の先生で赴任したとき生徒でアイヌの子がいてそれが初めてでしたね。それまで全然わからなかったですね。(アイヌの子どもに対しては他の先生も皆分け隔てなく?)そうですね。僕がなった頃はみんなそういう感じでしたね。今もまだ最初に教えた子どもと付き合っていますよ。もう65過ぎていますがね。だから、初めからそういう感じは何もないですね。みんな平等で。たまに会ってもね、一緒に一杯飲んで、騒いで、カラオケに行って、だから、そんな感じは何もないですね。(男性) ◆私はもともと山林関係の仕事もしたことがございますので、その時に相当アイヌの人がたが作業に来ておりましたので、そういう関係上アイヌの人がたとつきあいはするようになりましたね。(私達家族でつきあっている方がいます。その方は最初は絶対アイヌということは口にしないし、言われるのも嫌でいたんですけど、お父さんと家族ぐるみのつきあいでいますから、自分のほうから言う、そして、お父さんとそっちのほうの勉強もしていますから、何でも教えてくれたり、本当にいいお付き合いしていますけどね。…妻)。(男性) ◆私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとつきあひして、今でもだから、そこのじいちゃん、ばあちゃんも亡くなったけれど、子どもさんたちとはつきあひしていますけれどね。(女性) ◆私達もう農協に買物に行ったり姉の友達にも会うけど、普通どおりに挨拶して話もするし、同級生は「遊びに行くよ」って、普通につきあうから。つまはじきするわけでもないから。普通どおりにいます。常時遊ぶっていったら変ですけど。うちの旦那は同級生とそんなに遊ばないけど、私達はちょこちょこ会いますから、普通どおり、何の偏見もなく接していますから。同じです。何も何かするわけでもないね。(女性)
伊達	青年	◆アイヌに対する関心がまわりの人もなくなってきているような気がする。いい意味では差別がない。登別でも厚真でも伊達でも差別的なことは感じたことがない。(女性)
	壮年	◆親会社の社員にアイヌ系の人が出て、話をするきっかけがあった。…なかなか地域、地域で接することがないから何とも言えない。直接アイヌの方と接する場面はほとんどない。…特別意識はないが、集団になつてしまうと、アイヌ民族と近代的な人と自然に集団になつて分かれるような気がする。日本の国民性かもしれない。(男性)
	老年	◆有珠に何人か現在もつきあっている人はいる。…アイヌの長老が有珠には何人かいる。その1人と親しくしており、行事の時に撮らせて下さいということで、儀式を撮影させてもらう。アイヌの血を引いている若い知り合いもいる。その人は漁師をしていて、アイヌの伝統文化について勉強中。有珠で漁師をしている人の半数近くはアイヌの血を引いていると思う。…仕事や写真の経験を通じてアイヌの人とつきあっているから、アイヌの人とは近い関係にあり、特別にどうのという感覚ではない。(男性) ◆海岸には漁師をしているアイヌが多く、船にも電気関係の仕事があるので、仕事でアイヌの人と関わるようになった。家に行くと、食事をご馳走になったり、おばあちゃん、おじいちゃんと話をしたりすることもあった。事業を始めた若い頃は歯を黒く染めている人を見

		た。そういう人を見かけたのは昭和30年、40年くらいまでだったと思う。耳飾りをした人は見たことがない。…仕事をしながらアイヌの人との関わりはけっこうあった。商売をやっていて、有珠から伊達市内をあちこち歩くと「土地を取られた」という嘆きを聞く。お客さんで、もともとのアリューシャン列島からのアイヌの人もいた。アイヌの人は人懐っこい、会話はするし、いい印象がある。（男性） ◆ここに来て13年になるが、その間にアイヌの人たちと関わったことは一度もなく、会ったこともない。そばにもいない。その辺はよくわからない。伊達においてアイヌの人たちはいたんだろうけれど、何処でどうやってアイヌの人たちがいたのかもわからないし、会ったこともない。…タクシーに乗っていて、ひとりアイヌで、癖のわるい人がいた。（お酒を）飲んでタクシーに乗ってきた。普通同じ人間として暮らしていくのに、そんなことをしたらどうかということはわかるから、そういうのは一部だと思う。そういうことが伝わる。お互いに悪い。アイヌの人たちも悪いし和人も悪い。（男性） ◆伊達では職場(学校)の同僚で顔立ちからアイヌとわかる人がいた。まわりがすごく気を使うというのか、そういう話題は出さないということを感じた。先生もそういうことに関してはいっさい触れないし、深いところにちょっとした差別というか私達とは違うという区別があるのかなと思った。（女性） ◆今も近所にアイヌの人はいるけれど、言われるまでそんなに気にならない。気にしないし、気になくなってきたいて、生活に溶け込んでいる感じがする。アイヌだと言われるとああそうなんだと思うくらいで、言われるまでは何も感じないし、普通に接していて、みなさん仕事している。アイヌだということを際立たせているところがあったりするとそういうふうに感じるのかもしれない。たとえば平取に行ったりすると、アイヌの人たちなのかなと思うのかもしれない。…アイヌの人は自分からはアイヌだと言わない。まわりの人が「あの人はアイヌだ」と教えてくれる。こちら辺では嫌な言葉だが、アイヌのことを「ヌー」と言う。「あのアイヌだ」と教えてくれる人は、アイヌに対して好ましく思っていないというより、親からの刷り込みがあるという感じがする。親の世代で「ヌー」という言葉を使っていたのではないかと思う。（女性）
白糠	青年	—
	壮年	◆その家も1人でアイヌの人が住んでいるんですけど。そこもアイヌの人です、向かいのお家ね。結構いますよ。うちの隣の隣もそうだし。ちょっと偏屈なんだよね、そこのおじさんね。そしたら、向かいのおばさんが行くと、何かよくけんかするらしいんだけど。町内会費とか集めに行くのは嫌だと言うの、偏屈だから。でも、私が行くと、そうでもないんだよね。人を見るんだねと言うんだよね。「誰だあ」って言うの。「〇〇です」。「ああ、姉さんか」と言って出てきて、お金をちゃんと払ってくれるし、全然そんな悪い人じゃないんだけど、やっぱり何か気のさわるようなことを言うと怒り出すみたいで。（女性） ◆毎年、もう十何年かな、あの子が小学校1年のときにはもういたんだから、もう20年間近く。20年じゃないね、14～15年はずっと来てもらってる人なんですよ。もう親戚みたいな感じで。（女性）
	老年	◆だんだん認められるっていうか、普通にしていると普通の生活さ。俺らもそう、みんなこうね。それを町内だって、そこそそば屋さんだってそうなんだけどね。うちの隣も、少しかかっているんだけどね（「アイヌの血筋なんだけどね」の意と思われる…著者注）。普通に付き合っているうえでは別にね。それでもまだ嫌う人は嫌うようだけどね。（男性） ◆ちょっと身近にいないので、町内にいないんでちょっとその辺の反応は分かりませんけどね。ですから町内の集まりでもないんで、アイヌ民族について話すことはないんですよ。（町内会に対してアイヌの人から）こんな催しものあるから来いやとかっていうのはないです。大きいお祭りとかなんか町内にポスターみたいの貼らさることはありますけどね。（男性） ◆（仕事の現場には）いました。1人だけ。ちょうど白糠の人だったんですよ。ですから亡くなった時は葬儀にも行きましたけども。普段付き合ってる、仕事上の付き合いだけです。普段から付き合ってる何かしてるという感じではないですよ。仕事上の関係だけです。（男性） ◆その頃ね、子ども達もね、一番困るのは座席替えさ。子ども達に「座席替えしてくれ」って言うでしょ。替えるときね、アイヌの子と一緒にさせるとね。だってむかしは、両袖の机だから。ひとつひとつでないから。どうしても、座席替えしたら、ふたり組になっちゃうわけさ。そうするとね、その頃のアイヌの人達ね、体臭がまだあるわけさ。それからもうひとつはね、その頃は、不潔な生活。低レベルな生活だったから、それで、においがするからいやだ。それから、肌の色が違う。そういうので、子ども達がいやだったね。（男性） ◆近所つちゅうか、その国道ありますよね。国道から向こうなんですけども、ちょっと飲み友だちっていうんですか、たまたま私の行く店にご夫婦で来る人も、2人ともそうなんです。だから、私たちは何にも違和感がなくお付き合いはしてるんですけども。（女性） ◆うちは漁師だから、船頭さんから、もう主要な人方みんなそっち系統の人なんです。だから、特別、一緒に生活、ご飯炊きさんもみんなそう、その家族とかで。だから、でも一応言われたのは「うちはそういう人たちと一緒に仕事してるんだから、アイヌとかっていう言葉は使っちゃいけないよ」って、ここに来たときに言われてたのね。それでも、特別、苦にもしないで一緒に仕事を、うん、うちは魚取ってくれる人は何であろうが、いい人なんだからっていう感じでやってるから。（女性）

第3節 現在の生活における交流

次に、アンケートデータをもとに、現在の生活における交流の実態を、交流を規定すると考えられる諸条件に関わらせて確認していく。その際、上記のように、札幌市における交流人口はきわめて少ないことから、札幌市に関しては、交流状況を規定すると考えられる諸条件（「ジェンダー」「職業生活」「地域への根つき方」「地域における諸活動」「個人としてのアイヌ文化の経験」「市民としてのアイヌ文化への関心」）それぞれについてクロス集計をして得られた数値に関して、その大小の意味を判断することが困難であることは明らかである。そこで、以下、それらの諸条件に関して比較検討するにあたっては、新ひだか、伊達、白糠、むかわの4地域に限定してその調査結果を取り上げる。交流の内容は、「近所付き合い」「職場での付き合い」「趣味の付き合い」「子どもを介した付き合い」「インターネットを介した付き合い」「学生時代からの付き合い」（「その他」）に分類し、交流の内容を整理した表では、各交流内容に関して「交流有」と回答されたうち、数値の高い2位までの項目を列挙した。

第1項 属性

それでは、ジェンダーおよび職業という視点からアイヌの人々との交流状況を見ていこう（表7-5、表7-6）。いずれも個人のライフスタイルを規定する基本的な条件である。

まず、性別による交流頻度を見る。我々の社会はこれまで男性と女性をそれぞれ異なる場所に配置してきており、その不均衡が解消されつつあるとはいえ、男女の生き方にはまだ大きな違いがある。こうした立場の違いは交流にどのような影響をもたらしているのだろうか。表7-5を見ると、むかわのみすべての世代において男性の交流有の数値が女性を上回っているが、他3地域では世代によって男女の順位は異なっており、4地域に共通するのは老年層における男性優位という点のみである。その理由としては、前述のとおり、ライフスタイルの変化が交流の仕方を大きく規定することがあげられよう。退職世代の男性が地域住民としての活動に参入するようになり、それに応じてアイヌの人々との交流も増えるためと解釈される。

そこで、男性と女性とで交流の内容がどのように異なるのかを確認すると、男性においては、「職場付き合い」の交流有の比率が各種交流のなかで筆頭を占める場合が相対的に多いことがわかる。就労世代である青年層と壮年層、とくに壮年層においては4地域すべてにおいて「職場付き合い」の交流有の数値が最も高い。つまり、男性の壮年層においては、職場でのアイヌの人々との出会いや交流がなければ、交流頻度は高くなりにくいということである。それに対して、女性の交流内容においては、交流有の比率の高さで「近所付き合い」が一番である場合が相対的に多い。また、「子どもを介した付き合い」が上位2つに含まれるのは女性のみである。これは、女性が家事や育児の主たる担い手であり、家事の一環あるいは子育て繋がりとしての近所付き合いを日常的に行っていることを示す結果といえる。このように、概して、男性の場合は「職場付き合い」、女性の場合は「近所付き合い」におけるアイヌの人々との交流の多寡が男女それぞれの交流有の数値の高低として表れているとみることができる。

続いて、職業によって交流状況がどのように異なるのかを見よう。就業する者にとって、職場は一日のうちの多くの時間を過ごすところであり、仕事を通じて様々な人と知り合うところでもある。アイヌの人々と仕事を介して交流が生まれる機会がより多い職業とはどのような職業なのだろうか。まず、住民の職業をホワイトカラー職とブルーカラー職にわけると、伊達におけるホワイトカ

ラー職従事者の比率が他地域よりも若干高めである（青年層と壮年層においては5割を超える）とはいえ、全体をながめると、その比率は2割台から4割台が中心である。したがって、これらの地域住民においては、ホワイトカラー職に就く者は多数派とはいえない状況である。さらに、各地域とも、若い世代ほどホワイトカラー職従事者の比率が高くなっており、とりわけ老年層ではホワイトカラー職の割合が他の2世代に比べて10ポイント以上低いことに注目したい。地域の産業構造や経済状況の影響はもちろんであるが、青年層と壮年層は老年層に比してより高い教育水準にある場合が多いことから、ホワイトカラー職に就く比率がより高くなっているものと思われる。

表7-5 交流の多寡を規定する条件（1）

		ジェンダー	職業
		a. 男女比率 b. 性別 × 交流有	a. ホワイトカラー職に就く b. ブルーカラー、ホワイトカラーの別 × 交流有
新ひだか	青年	a. 男性 49.4% 女性 50.6% b. 女性 25.6% < 男性 33.3%	a. 46.0% b. ブルーカラー 29.6% ＜ホワイトカラー 43.5%
	壮年	a. 男性 47.5% 女性 52.5% b. 男性 52.3% < 女性 61.1%	a. 43.1% b. ホワイトカラー 51.1% ＜ブルーカラー 66.1%
	老年	a. 男性 47.7% 女性 52.3% b. 女性 58.3% < 男性 67.6%	a. 31.5% b. ホワイトカラー 65.2% ＜ブルーカラー 68.0%
伊達	青年	a. 男性 50.6% 女性 49.4% b. 男性 2.3% < 女性 7.1%	a. 54.7% b. ホワイトカラー 0.0% ＜ブルーカラー 6.9%
	壮年	a. 男性 43.3% 女性 56.7% b. 女性 10.5% < 男性 11.4%	a. 50.7% b. ホワイトカラー 7.1% ＜ブルーカラー 14.7%
	老年	a. 男性 46.9% 女性 53.1% b. 女性 15.5% < 男性 24.1%	a. 36.4% b. ホワイトカラー 25.0% ＜ブルーカラー 38.8%
白糠	青年	a. 男性 43.8% 女性 56.3% b. 男性 9.6% < 女性 11.1%	a. 41.9% b. ホワイトカラー 7.7% ＜ブルーカラー 16.7%
	壮年	a. 男性 45.8% 女性 54.2% b. 男性 36.7% < 女性 40.9%	a. 43.2% b. ブルーカラー 39.1% ＜ホワイトカラー 48.6%
	老年	a. 男性 48.4% 女性 51.6% b. 女性 27.6% < 男性 43.1%	a. 26.2% b. ブルーカラー 53.3% ＜ホワイトカラー 68.8%
むかわ	青年	a. 男性 58.0% 女性 42.0% b. 女性 24.1% < 男性 32.5%	a. 45.5% b. ホワイトカラー 15.0% ＜ブルーカラー 45.8%
	壮年	a. 男性 45.2% 女性 54.8% b. 女性 45.4% < 男性 57.8%	a. 40.2% b. ホワイトカラー 43.6% ＜ブルーカラー 44.8%
	老年	a. 男性 47.8% 女性 52.2% b. 女性 59.1% < 男性 75.5%	a. 26.1% b. ホワイトカラー 55.6% ＜ブルーカラー 72.5%

*「交流有」とは交流が「よくある」「たまにある」の合計の数値である。以下、全表において同じ。

*ホワイトカラー：「事務的」「専門・技術的」「管理的」

ブルーカラー：ホワイトカラー以外の職、ただし「その他」を除外して集計した。

さて、ここでホワイトカラーとブルーカラーの別による交流頻度を見ると、ブルーカラー職従事者において交流頻度がより高い傾向が認められる。とくに、壮年層と老年層のブルーカラー職従事

者の優位は白糠を除く3地域に共通する現象である。ブルーカラー職においては、アイヌの人々と同僚あるいは取引関係者として付き合う機会がより多く得られると推察される。なかでも農林水産的職業従事者における交流頻度が他に比して高いため、この職種が存在がその地域のブルーカラー職従事者全体の交流頻度を左右する格好となっている。ただし、交流内容を確認すると、ホワイトカラー職とブルーカラー職とで顕著な違いが見出せるわけではない。表7-6では、ホワイトカラー職のうち事務的、専門・技術的、管理的の3つ、ブルーカラー職のうち技能工、農林水産的、サービスの3つを取り出して、交流有と回答された上位2つの交流内容を列挙しているが、どちらの職種においても「職場付き合い」が最も多く、次いで「近所付き合い」であり、この2つの交流が中心となっている。

表7-6 交流の内容 交流「あり」と回答された上位2つ(1)

		ジェンダー	職業	
		a. 男性 b. 女性	ホワイトカラー a. 事務的 b. 専門・技術的 c. 管理的	ブルーカラー d. 技能工 e. 農林水産的 f. サービス的
新ひだか	青年	a. 職場, 学生 b. 職場, 学生	a. 近所 / 職場 / 学生, — b. 職場, 近所 / 趣味 / 子ども c. は該当者なし	d. 近所 / 職場 / 学生, 趣味 / 子ども e. 学生, — f. 職場 / 学生, —
		a. 職場, 近所 b. 近所, 職場	a. 職場, 近所 / 学生 b. 近所, 職場 / 子ども c. 学生, 職場	d. 学生, 近所 / 職場 e. 近所, 子ども f. 職場, 近所 / 子ども / 学生
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 学生, 職場 b. 近所 / 趣味, 職場 / 学生 c. 職場, 近所	d. 職場, 近所 e. 近所, 趣味 f. 職場, 近所
	青年	a. 趣味 / 学生, — b. 近所 / 職場, —	a. — b. — c. 該当者なし	d. 趣味, — e. — f. —
		a. 職場, 趣味 b. 職場, 近所	a. 近所 / 職場 / 学生, — b. 職場, 趣味 c. —	d. 近所 / 職場, — e. 近所 / 職場 / 子ども, — f. 近所 / 職場, —
伊達	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 学生	a. — b. 近所, 子ども c. 近所, —	d. 職場, — e. 近所, 職場 f. 近所 / 職場, —
	青年	a. 学生, 近所 / 職場 b. 近所 / 職場 / 学生, —	a. 学生, — b. 職場, — c. は該当者なし	d. 近所 / 学生, — e. — f. 学生, —
		a. 職場, 学生 b. 職場, 近所	a. 職場, 趣味 / 子ども b. 職場, 子ども / 学生 c. 職場 / 趣味, 学生	d. 職場, 近所 / 子ども e. 近所, 職場 / 学生 f. 職場 / 学生, 近所
	老年	a. 近所, 職場 / 趣味 / 学生 b. 近所, 職場	a. 近所 / 職場 / 子ども, — b. 職場, 近所 c. 近所, 学生	d. 職場 / 趣味, 近所 e. 近所 / 職場, 学生 f. 趣味, 近所 / 職場
白糠	青年	a. 職場, 近所 b. 子ども / 学生, 職場	a. 近所 / 職場 / 学生, — b. 職場, 趣味 / 学生 c. は該当者なし	d. — e. 職場, 子ども f. 近所 / 職場 / 趣味 / 子ども / 学生, —
		a. 職場, 学生 b. 近所, 職場	a. 学生, 職場 b. 職場 / 子ども, 近所 / 学生 c. 職場, —	d. 職場, 近所 / 学生 e. 近所, 職場 f. 職場 / 子ども, —
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, — b. 近所 / 職場 / 学生, 子ども c. 職場 / 趣味, —	d. 近所, 職場 e. 近所, 職場 f. 近所 / 職場, 趣味 / 学生
	青年	a. 職場, 近所 b. 子ども / 学生, 職場	a. 近所 / 職場 / 学生, — b. 職場, 趣味 / 学生 c. は該当者なし	d. — e. 職場, 子ども f. 近所 / 職場 / 趣味 / 子ども / 学生, —
		a. 職場, 学生 b. 近所, 職場	a. 学生, 職場 b. 職場 / 子ども, 近所 / 学生 c. 職場, —	d. 職場, 近所 / 学生 e. 近所, 職場 f. 職場 / 子ども, —
むかわ	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, — b. 近所 / 職場 / 学生, 子ども c. 職場 / 趣味, —	d. 近所, 職場 e. 近所, 職場 f. 近所 / 職場, 趣味 / 学生
	青年	a. 職場, 近所 b. 子ども / 学生, 職場	a. 近所 / 職場 / 学生, — b. 職場, 趣味 / 学生 c. は該当者なし	d. — e. 職場, 子ども f. 近所 / 職場 / 趣味 / 子ども / 学生, —
		a. 職場, 学生 b. 近所, 職場	a. 学生, 職場 b. 職場 / 子ども, 近所 / 学生 c. 職場, —	d. 職場, 近所 / 学生 e. 近所, 職場 f. 職場 / 子ども, —
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, — b. 近所 / 職場 / 学生, 子ども c. 職場 / 趣味, —	d. 近所, 職場 e. 近所, 職場 f. 近所 / 職場, 趣味 / 学生

* 交流内容の上位2つを掲げる際は「その他」を除外した。以下、全表において同じ。

* 同率のものが複数ある場合は、/ (スラッシュ) で示した。以下、全表において同じ。

* 交流の内容: 「近所」は「近所付き合い」、「職場」は「職場付き合い」、「趣味」は「趣味の付き合い」、「子ども」は「子どもを介した付き合い」、「学生」は「学生時代からの付き合い」。「インターネットを介した付き合い」は該当者ゼロであった。以下、全表において同じ。

第2項 地域での暮らし

(1) 地域への根つき方

次に、交流状況を、地域への根つき方（本人の来住時期、居住地区、定住志向）という視点から整理していこう（表7-7、表7-8）。

はじめに、来住時期に着目する。アイヌの人々と地理的に近いところで暮らした時間の長さは交流のありように影響を与えていると予想されるがどうだろうか。地元生まれ・育ちである者の比率は2割台～5割台である。世代の高低と数値の高低は連動してはいないが、地域全体として数値が高い傾向にある順に並べると、新ひだか、むかわ、白糠、伊達となる。これはそのまま交流有の数値が高い地域の順であることから、地元生まれ・育ちの者がより多い場合により多くの交流が成立しているとの予想が成り立つ。そこで、来住時期の違いによる交流頻度の高低を見ると、4地域のすべての世代において、地元生まれ・育ちである者が優位にある。つまり、長くその地に居住することがアイヌの人々との交流をより多くもたらしめているということである。交流の内容は、来住時期の違いにかかわらず「職場付き合い」「近所付き合い」が中心であるが、1点「学生時代からの付き合い」に関しては、地元生まれ・育ちである者において交流有と回答される比率がより高くなっている。地元生まれ・育ちであれば、少なくとも義務教育段階までの学校教育をその地で修めている者が多いと考えられることから、学校友達としての継続的な（あるいは断続的な）交流の存在が交流頻度をより高くしていると見ることができる。

さて、この「地元生まれ・育ちか否か」は育った環境に注目するものであるが、「アイヌの人々が多く住む地区に住んでいるか否か」という現在の生活環境も交流には大きな影響を持つと考えられる。そこで、居住地区に注目して交流状況を見る。アイヌ集住地区である伊達の有珠地区と白糠の白糠地区に焦点を当てると、伊達の壮年層・老年層と白糠の青年層・壮年層・老年層においては、有珠地区と白糠地区居住者の交流頻度が最も高いか2番目に高くなっている。アイヌの人々が集住する地区に暮らすことがより多くの交流をもたらしにつながっているといえるだろう。ただし、交流内容については、地区としての特徴を抽出するには至らず、また、地域や世代による違いを見出すことは困難である。

ここまで、来住時期と居住地区という、地域での暮らしに関わる過去と現在に注目して交流を見てきた。では、将来設計、すなわち定住志向という点から見るとどうなのだろうか。地域への愛着・帰属感を持つことはその地域における交流を盛んにすることにプラスに働くのだろうか。まず、現在地に定住したいと考える者の比率を列挙すると、地域や世代によって3割台～8割台と開きがあるが、とくに、他の地域に比して伊達における定住志向が各世代とも強いことに気づく。伊達は温暖な気候をもって移住者（とくにリタイア組）呼び込みに成功している地域でもあり、住民の生活満足度が高いことが理由として考えられよう。他3地域の数値を見ると、交流有の比率がより高い新ひだか・むかわにおいては、白糠に比べて、青年層と老年層における定住希望者の比率が若干高い傾向が認められる。このとき、4地域すべてに共通するのは、年代が高くなるにしたがって定住志向が確実に強まることである。定住志向の落差が、青年層と壮年層ではなく、壮年層と老年層との間でより大きくなっていることについては、老年層＝退職世代においては慣れ親しんだ現住地から動くことを積極的に考えることはしない者が増えるためと解釈することができる。

そこで、定住志向に関するこのような傾向をふまえ、交流頻度を移転希望者と定住希望者別に見

ると、全体的には定住希望者における交流有の数値の方が高い傾向が認められ、老年層に限って言えば、4地域すべてにおいて、定住希望者の優位が認められた。老年層における定住希望とは、漠然とした定住の夢ではなくきわめて現実的な計画としてあると考えられ、だからこそ、アイヌの人々との交流についても、地域での生活をより充実させようとするなかで取り組まれているものと推察される。交流内容には定住志向による違いを見出すことは難しく、「職場付き合い」「近所付き合い」を中心として「学生時代からの付き合い」「子どもを介した付き合い」が加わるという状況である。その地域に住み続ける間は多様な人間関係をそれなりに維持しなければならない、つまり選好的に交流をすることが難しいとすれば、定住志向の違いが直ちに現実生活における交流内容の違いとして表れるとは考えにくいということではなかろうか。

（2）地域における諸活動

続いて、交流状況を、地域における諸活動（近所付き合い、自治会活動）という視点から確認する（表7-7、表7-8）。ここで取り上げるのは、地域に対する馴染みや愛着といった個人的なものではなく、その地域のなかで繰り広げられる人間関係である。

まず、近所付き合いから見ていこう。近隣の人々との付き合いは、偶然に始まり、何らかのきっかけを得て深まっていく類のものであり、生活環境やライフスタイルによって左右されるところも大きい。とはいえ、そうした付き合いを盛んにするか、あるいは疎んじるかどうかという姿勢がアイヌの人々との交流に一定の影響を与えていることは十分に考えられる。表7-7を見ると、近所付き合いのうち最も密な付き合いである「互いの家を行き来している」比率は、地域によって数値に多少の幅はあるものの、青年層と壮年層では1割に満たないのに対して、老年層では総じてそれより高いという点で4地域同様の傾向を示している。ここから、地域での生活が中心となっている老年層がより親密な近所付き合いの主な担い手であることがあらためて確認できる。

そこで、交流頻度を見ると、新ひだかやむかわのように交流有の数値が高い地域では、近所付き合いの濃さと交流頻度がほぼ比例しているのに対して、伊達や白糠ではそれほど規則的ともいえない状況であることがわかる。そして、4地域すべてに共通する点としては、老年層では「互いの家を行き来している」者において交流頻度が最も高いことがあげられる。近所付き合いを盛んにするところにアイヌの人々とのより多くの交流があるということである。青年層と壮年層に関しては、近所付き合いの親密度が高くなるのが順当に交流頻度の上昇につながっているわけではなく、「会った時に世間話をする」者の交流頻度が「互いの家を行き来している」者よりも高い場合も見受けられる。これは、この2世代の生活における近所付き合いの比重が低く、より親密な近所付き合いがあまりなされていない実態と矛盾しない。交流の内容を見ると、「近所付き合いがない」と回答する者においては、交流有と回答された項目がそもそもゼロである場合が多い。「道で会えば挨拶をかわす程度」以上の近所付き合いになってはじめて、「近所付き合い」「職場付き合い」を中心に様々な交流が行われるようになるという結果である。

一方、自治会活動は、社交であると同時に、地域のために自発的に参加する活動である。つまり、この活動への積極性の有無は地域全体に対する継続的な関心の程度を示すものであり、アイヌの人々との交流を含めた地域交流を左右することが考えられる。まず、自治会活動に「積極的に参加している」人々がどのくらいいるのかを確かめると、伊達の数値が他3地域に比べてとくに低調である。他3地域より自治体としての規模が大きく、都市化が進んでおり、地域の活動への関心を

もたない者が相対的に多いことがひとつの理由と考えられる。¹⁾ こうした地域による違いがある一方で4地域に共通する点もある。それは、世代が高くなるにしたがって、自治会活動に積極的に参加する比率が高くなることである。

それでは、交流頻度を見てみよう。表7-7によると、4地域とも、壮年層と老年層については、「積極的に参加している」者において交流頻度は最も高くなっている。「まったく参加しない」者と「あまり参加しない」者の違いはそれほど明確ではないが、「ある程度」以上の参加の実態がある場合は、積極性が高い者において交流頻度はより高くなる。したがって、アイヌ集住地においては、積極的に自治会活動に参加することがアイヌの人々と知り合い、交流を持つことに直結していると考えることができる。ただし、青年層は自治会活動への参加が少なく、さらに、自治会活動への積極性の強さが交流頻度の高さに対応していないという結果であった。若い世代が地域の活動に参加しない傾向にあることは一般に指摘されていることであり、青年層にとっては、自治会活動への参加が地域への関心を測る指標にはならないということだろう。交流内容を見ると、「近所付き合い」と「職場付き合い」を中心に「趣味の付き合い」「子どもを介した付き合い」「学生時代からの付き合い」の計5項目について交流がなされているが、地域や世代による特徴を見出すことは難しい。

表7-7 交流の多寡を規定する条件(2)

		地域への根つき方			地域における諸活動	
		来住時期 a. 地元生まれ・育ちである b. 地元生まれ・育ちの有無 × 交流有	居住地区 各地区居住の有無 × 交流有	定住志向 a. 定住したい b. 定住希望有無 × 交流有	近所付き合い a. 互いの家を行き来している b. 付き合い密度 × 交流有	自治会活動 a. 積極的に参加している b. 活動への積極度 × 交流有
新ひだか	青年	a. 50.6% b. 非・地元 21.4% ＜地元 37.2%	静内 27.6% ＜三石 36.9%	a. 42.9% b. 移転希望 28.6% ＜定住希望 38.9%	a. 3.6% b. 無 20.0%＜挨拶 25.0%＜行き来 33.3%＜世間話 42.2%	a. 7.1% b. まったく 22.2%＜あまり 33.3%＜積極的 33.4%＜ある程度 36.3%
	壮年	a. 54.2% b. 非・地元 48.8% ＜地元 63.9%	三石 47.5% ＜静内 59.0%	a. 57.5% b. 移転希望 51.8% ＜定住希望 65.1%	a. 4.5% b. 無 0.0%＜挨拶 57.7%＜世間話 61.7%＜行き来 62.5%	a. 20.1% b. まったく 37.0%＜あまり 47.7%＜ある程度 63.9%＜積極的 66.6%
	老年	a. 35.5% b. 非・地元 59.1% ＜地元 69.3%	静内 61.4% ＜三石 70.0%	a. 83.6% b. 移転希望 27.3% ＜定住希望 67.2%	a. 15.2% b. 無 25.0%＜挨拶 50.0%＜世間話 66.6%＜行き来 78.8%	a. 27.4% b. まったく 20.0%＜あまり 47.0%＜ある程度 65.2%＜積極的 70.0%

伊達	青年	a. 38.1% b. 非・地元 3.8% ＜地元 6.2%	黄金、稀府、東、 中央、有珠 0.0% ＜市街 7.3% ＜長和 20.0%	a. 52.4% b. 移転希望 0.0% ＜定住希望 9.3%	a. 2.4% b. 無、行き来 0.0% ＜挨拶 1.7% ＜世間話 18.8%	a. 1.2% b. 積極的 0.0% ＜まったく 2.8% ＜ある程度 5.3% ＜あまり 6.8%
	壮年	a. 33.5% b. 非・地元 9.6% ＜地元 13.2%	関内、長和、大滝 0.0% ＜東 5.1% ＜稀府 11.1% ＜市街 11.4% ＜中央 13.5% ＜黄金 14.3% ＜有珠 71.5%	a. 66.7% b. 定住希望 9.1% ＜移転希望 28.6%	a. 4.0% b. 無、行き来 0.0% ＜挨拶 10.8% ＜世間話 13.6%	a. 5.9% b. あまり 6.2% ＜まったく 10.9% ＜ある程度 13.9% ＜積極的 16.6%
	老年	a. 21.3% b. 非・地元 16.1% ＜地元 30.7%	中央 8.8% ＜大滝 14.3% ＜市街 15.1% ＜黄金 15.4% ＜東、長和 20.0% ＜稀府 21.1% ＜有珠 63.2% ＜関内 71.5%	a. 84.9% b. 移転希望 0.0% ＜定住希望 20.5%	a. 13.6% b. 無 0.0% ＜挨拶 13.6% ＜世間話 15.6% ＜行き来 48.7%	a. 18.2% b. あまり 4.9% ＜まったく 7.1% ＜ある程度 20.8% ＜積極的 37.8%
白糠	青年	a. 51.0% b. 非・地元 8.4% ＜地元 12.0%	茶路、庶路 0.0% ＜白糠 19.2%	a. 34.0% b. 移転希望 11.8% ＜定住希望 18.8%	a. 6.1% b. 無、世間話 0.0% ＜挨拶 11.1% ＜行き来 33.3%	a. 4.2% b. 積極的、ある程 度 0.0%＜まったく 11.8%＜あ まり 15.8%
	壮年	a. 42.7% b. 非・地元 37.3% ＜地元 41.1%	茶路 15.4% ＜庶路 31.8% ＜白糠 47.3%	a. 58.6% b. 定住希望 42.7% ＜移転希望 46.1%	a. 3.9% b. 行き来 20.0% ＜挨拶 23.8% ＜世間話 54.5% ＜無 66.7%	a. 16.8% b. まったく 7.7% ＜あまり 37.1% ＜ある程度 42.6% ＜積極的 50.0%
	老年	a. 37.1% b. 非・地元 34.8% ＜地元 36.1%	庶路 27.2% ＜茶路 30.0% ＜白糠 41.6%	a. 77.0 % b. 移転希望 20.0% ＜定住希望 41.4%	a. 12.8% b. 挨拶 25.3% ＜無 33.4% ＜世間話 37.7% ＜行き来 53.5%	a. 32.1% b. まったく 16.7% ＜あまり 24.3% ＜ある程度 35.9% ＜積極的 43.1%
むかわ	青年	a. 53.6% b. 非・地元 25.0% ＜地元 32.4%	(設問なし)	a. 38.8% b. 定住希望 30.8% ＜移転希望 42.8%	a. 2.9% b. 無 0.0%＜挨 拶 23.7%＜世 間 話 37.5%＜行 き 来 100.0%	a. 13.0% b. あまり 17.7% ＜ある程度 26.1% ＜まったく 30.0% ＜積極的 55.5%
	壮年	a. 42.7% b. 非・地元 36.7% ＜地元 70.1%	(設問なし)	a. 51.6% b. 移転希望 53.1% ＜定住希望 59.5%	a. 9.0% b. 無 11.1%＜挨 拶 44.0%＜世 間 話 60.3%＜行 き 来 71.5%	a. 13.4% b. まったく 35.0% ＜あまり 42.5% ＜ある程度 52.7% ＜積極的 76.2%
	老年	a. 40.0% b. 非・地元 64.5% ＜地元 71.7%	(設問なし)	a. 78.0% b. 移転希望 55.0% ＜定住希望 73.0%	a. 12.7% b. 無 50.0%＜挨 拶 58.6%＜世 間 話 70.5%＜行 き 来 82.7%	a. 27.6% b. あまり 41.0% ＜まったく 41.7% ＜ある程度 70.9% ＜積極的 81.3%

* 近所の人たちとの交流：「無」は「付き合い無し」、「挨拶」は「道で会えば挨拶する程度」、「世間話」は「会った際に世間話をする」、「行き来」は「互いの家を行き来する」

* 自治会の活動や行事：「積極的」は「積極的に参加している」、「ある程度」は「ある程度参加している」、「あまり」は「あまり参加していない」、「まったく」は「まったく参加していない」

表7-8 交流の内容 交流「あり」と回答された上位2つ(2)

		地域への根つき方			地域における諸活動	
		来住時期 a.地元生まれ・育ち b.地元生まれ・育ちではない	居住地区	定住志向 a.ずっと住みたい b.移りたい	近所付き合い a.付き合い無し b.挨拶 c.世間話 d.家を行き来	自治会活動 a.積極的 b.ある程度 c.あまり d.まったく
新ひだか	青年	a.学生,職場 b.職場,近所/学生	a.静内b.三石 a.職場,学生 b.近所/学生,職場/趣味	a.近所/職場/学生,趣味/ 子ども b.職場,学生	a.職場/子ども/学生, — b.職場,学生 c.近所,職場/趣味/学 生 d.職場,—	a.近所,子ども b.職場/学生,近所 c.職場,学生 b.職場/学生,近所
	壮年	a.職場/学生,近所 b.近所,職場	a.職場,近所 b.近所,職場	a.近所,職場 b.職場,近所	a.— b.職場,近所 c.学生,子ども d.近所,学生	a.近所,職場 b.職場,学生 c.近所/職場,学生 d.職場,近所
	老年	a.近所,職場/学生 b.近所,職場	a.近所,職場 b.近所,趣味	a.近所,職場 b.近所,趣味	a.— b.職場,近所 c.近所,職場 d.近所,職場	a.近所,職場 b.近所,職場 c.近所/趣味,職場/学 生 b.近所/職場/子ども, —
伊達	青年	a.職場/趣味,— b.近所/学生,—	a.黄金 b.稀府 c.東 d.中央 e.関内 f.長和 g.有珠 h.市街 i.大滝 a.— b.学生,— c.— d.子ども,— e.— f.趣味,— g.子ども,— h.近所/職場,— i.—	a.近所/職場/ 趣味,— b.—	a.— b.趣味,— c.近所/職場/学生,— d.—	a.— b.近所/学生,— c.職場/趣味,— d.—
	壮年	a.職場,近所/学生 b.職場,近所/趣味/ 学生	a.職場,— b.職場,— c.職場,— d.学生,近所/職 場 e.— f.職場,— g.近所,職場/趣 味/学生 h.職場,学生 i.—	a.職場,近所/学 生 b.職場,近所/ 子ども	a.— b.職場,学生 c.職場,近所 d.—	a.近所/職場,— b.職場,近所/子ども/ 学生 c.職場,近所/趣味/学 生 d.職場,学生
	老年	a.職場,近所 b.近所,職場	a.職場/学生,— b.近所,子ども c.近所/趣味,職 場 d.近所,職場/子 ども/学生 e.近所,職場 f.近所/学生,— g.近所,職場 h.近所/趣味,職 場 i.近所,—	a.近所,職場 b.学生,—	a.— b.近所,職場 c.近所,職場 d.近所,職場	a.近所,子ども b.近所,職場 c.学生,近所/趣味 b.—
白糠	青年	a.学生,近所 b.職場,近所	a.白糠b.茶路c.庶 路 a.学生,近所 b.職場,— c.—	a.近所,職場/学 生 b.学生,—	a.— b.学生,近所 c.— d.職場,近所	a.— b.職場,— c.近所/職場/学生,— d.学生,近所

むかわ	壮年	a.職場,学生 b.職場,近所	a.職場,近所/学生 b.近所/職場/子ども,一 c.職場,近所	a.職場,子ども b.近所/職場,学生	a.職場,近所/趣味/学生 b.職場,近所/子ども c.職場,近所/学生 d.近所/職場/趣味/学生,一	a.近所/職場,学生 b.子ども,近所 c.職場,学生 d.職場,一
	老年	a.学生,職場 b.近所,職場/趣味	a.近所,趣味 b.近所/職場/学生,一 c.職場,近所	a.近所,職場 b.近所/趣味,職場/子ども/学生	a.学生,近所/趣味 b.職場,学生 c.近所,職場 d.近所,趣味/学生	a.近所,職場 b.近所,趣味 c.近所/職場/趣味/学生,一 d.学生,一
	青年	a.職場,近所/学生 b.職場,子ども	(設問なし)	a.職場,近所/子ども b.職場,近所	a.一 b.職場,趣味/学生 c.近所,職場 d.子ども,近所/職場/趣味/学生	a.子ども,近所 b.職場,近所/子ども c.職場,近所/趣味 d.職場/学生,近所
	壮年	a.近所,職場 b.職場,近所	(設問なし)	a.職場,近所 b.近所/職場,子ども	a.職場,一 b.職場,近所 c.近所,職場 d.近所,職場	a.近所,学生 b.近所,職場 c.近所,学生 b.職場,学生
	老年	a.近所,職場/学生 b.近所,職場	(設問なし)	a.近所,職場 b.近所,職場	a.近所,職場/子ども b.近所,職場 c.近所,職場 d.近所,趣味	a.近所,職場 b.近所,職場 c.職場,近所 d.近所,職場/学生

第3項 個人としてのアイヌ文化の経験や関心

(1) 学校教育

ここでは、学校教育（学校でアイヌの歴史を学んだ経験、学校でアイヌの文化を体験した経験）という視点から交流状況を見ていこう（表7－9、表7－10）。この場合の学校とは、小・中・高であり、人々の知的な基盤を形成する重要な教育段階である。

まず、学校でアイヌの歴史を学んだ経験がどの程度あるのかを確認してみよう。歴史を学ぶとは、人間について考え、時代について考え、未知の存在への理解を深めようとする作業である。したがって、アイヌの歴史を学ぶことは自分を知ることでもあり、アイヌの人々と自分の関係について考え、彼らへの関心を育てることにつながる重要な営みといえる²⁾。では、このような経験をした者はどのくらいいるのだろうか。3世代ともに数値が高い、あるいは3世代ともに数値が低いといった地域は見当たらず、青年層では、最高が新ひだかの59.5%、最低がむかわの38.8%、壮年層では、最高が伊達の38.7%、最低が白糠の27.0%、老年層では、最高が伊達の18.1%、最低が白糠の8.3%となっている。このように、世代毎に数値が高い地域はばらばらであるが、4地域通して同じ点は、世代が高くなるにしたがって歴史を学んだ比率が低くなることである。学校教育のなかで「自分たちが暮らす地域」について学び・調べる等の学習の重要性が強調されるようになるなかで、アイヌの歴史がより充実した内容をもって教えられるという経験をしているのはより若い世代である。

そこで、学校でアイヌの歴史を学んだ経験の有無と交流頻度との関係を見るならば、白糠の青年層とむかわの壮年層を除いては、4地域のすべての世代において、「学校で学んだ経験がある」者において交流有と回答する比率がより高い。つまり、全体としては、学校でアイヌの歴史を学ぶことがより多くの交流を持つことにつながっているということである。しかるに、冒頭で見たように、アイヌの人々との交流を主に担っているのは老年層であることから、老年層は学校で学んだ経験が

なくても他の世代よりも盛んに交流し、逆にいえば、若い世代は、学んだ経験があっても老年層のように交流をするようにはなっていないということである。

続いて、学校で学んだ経験の有無によって交流の内容に違いがあるかどうかを見ると、「職場付き合い」と「近所付き合い」が中心であるなかで、「学校で学んだ経験がある」者においてのみ「趣味の付き合い」が交流有の比率の筆頭あるいは2番目を占めることがあるという結果となっている（伊達青年層・老年層、白糠老年層）。「職場付き合い」や「近所付き合い」よりもさらに私的な「趣味の付き合い」が行われるうえで、アイヌの歴史を学んだ経験があることは、アイヌの人々との個人的な結びつきのきっかけを提供するということかもしれない。一方で、「学生時代からの付き合い」は学んだ経験の有無にかかわらず同じように行われている。学校友達との縁は、歴史の知識の有無によって直接規定されるものではないということである。それでは、「勉強」ではなく「体験」のインパクトはどのようなのだろうか。

次いで、学校でのもう一つの経験、学校でのアイヌの文化体験に注目してみよう。文化体験とは、実際に身体を動かして（見たり、触れたり、作ったり、踊ったり、食べたり…）学ぶ・知る・楽しむタイプのものであり、アイヌの文化やアイヌの人々に対する心理的な距離を一気に縮めるような（あるいは一気に遠ざけるような）強い印象を与えられとされる。したがって、体験の有無がその後のアイヌの人々との交流の有無や規模を左右することは大いにあり得ることである。表7-9を見ると、学校でアイヌの文化の体験をした者の比率は、学校でアイヌの歴史を学んだ経験に比べるとずっと低率で、青年層では1割～3割台、壮年層では1割台より少なく、老年層では最高が5.1%である。そのなかでは、白糠の青年層30.4%が突出して高い数値を示している。白糠青年層は、(2)で取り上げる「アイヌ文化についての知識」や「アイヌ文化に関する体験」に関しても、それぞれ知識有、体験有の比率が全地域全世代で最高値を示しているところから、若い世代に向けての学校教育を含めた啓蒙的な実践がより浸透している地域といえるのかもしれない。共通点としては、4地域すべてにおいて、世代が高くなるほど体験ありと回答する者の比率が低くなっており、この点では学校で学んだ経験の場合と同様の傾向を示している。

さて、文化体験と交流頻度の関係を見ると、ほぼすべての地域のすべての世代において、「学校でアイヌの文化の体験がある」者において交流有と回答する比率がより高い。老年層も学校で文化体験がある者においてより多くの交流をしているが、学校で文化の体験がなくても他の世代に比べればより盛んに交流していることは先に見たとおりである。一方、白糠の青年層では、体験をした者の比率は高いものの、それが必ずしもより多くの交流に結びついているわけではない。交流内容の傾向は、「職場付き合い」「近所付き合い」が多くを占めるなかで、「学校で文化の体験がある」者において「趣味の付き合い」が交流有の比率の上位2つに入る場合がより多く、「子どもを介した付き合い」は「体験がある」者においてのみ交流有と回答される上位2つに入っていることから、アイヌの文化を体験することが、交流の幅を広げることに貢献していることがうかがわれよう。例外は、むかわの壮年層である。これは上記「学校でアイヌの文化を学んだ経験」に関しても認められる地域的特徴であり、学校教育がアイヌの人々との交流頻度を押し上げることになっていない。この理由についてはさらなる検討が必要である。

（2）選好としてのアイヌ文化への関心

（1）で注目したのは、ある意味で「強制される」学び・体験ともいえる学校教育であるが、知

識を得る場は学校だけに限らない。むしろ、個人的な選好として得られた諸経験から学ぶことも多い。そこで、アイヌ文化への関心（アイヌ文化についての知識の有無、アイヌ文化に関する体験の有無、アイヌ文化に関する体験の希望有無）の実態に目を向けてみよう（表7－9、表7－10）。

表7－9 交流の多寡を規定する条件（3）

		個人としての文化への関心				
		a. 学校でアイヌの歴史学んだ b. 学んだ経験有無 × 交流有	a. 学校で文化体験した b. 文化体験有無 × 交流有	a. アイヌ文化の知識ある b. 文化の知識有無 × 交流有	a. アイヌ文化に関する体験ある b. 体験有無 × 交流有	a. アイヌ文化に関する体験希望する b. 希望有無 × 交流有
新ひだか	青年	a. 59.5% b. 無 18.8% ＜有 38.3%	a. 12.7% b. 無 27.5% ＜有 50.0%	a. 40.2% b. 無 26.5% ＜有 36.4%	a. 6.4% b. 無 26.0% ＜有 60.0%	a. 12.5% b. 無 25.7% ＜有 40.0%
	壮年	a. 30.5% b. 無 54.3% ＜有 66.6%	a. 4.7% b. 無 55.9% ＜有 87.5%	a. 48.6% b. 無 51.1% ＜有 63.6%	a. 15.3% b. 無 53.6% ＜有 68.0%	a. 14.9% b. 無 54.0% ＜有 62.5%
	老年	a. 10.2% b. 無 63.1% ＜有 75.0%	a. 1.5% b. 無 62.7% ＜有 66.6%	a. 58.3% b. 無 60.1% ＜有 64.3%	a. 25.0% b. 無 59.4% ＜有 73.1%	a. 22.6% b. 無 56.7% ＜有 75.7%
伊達	青年	a. 57.3% b. 無 2.9% ＜有 6.4%	a. 18.1% b. 無 4.4% ＜有 6.7%	a. 43.4% b. 無 2.1% ＜有 8.3%	a. 25.9% b. 無 1.7% ＜有 14.3%	a. 22.8% b. 無 3.3% ＜有 5.6%
	壮年	a. 38.7% b. 無 8.4% ＜有 12.0%	a. 8.6% b. 無 10.5% ＜有 11.8%	a. 45.9% b. 無 5.7% ＜有 18.0%	a. 11.1% b. 無 10.6% ＜有 15.0%	a. 26.3% b. 有 8.7% ＜無 10.9%
	老年	a. 18.1% b. 無 17.6% ＜有 24.5%	a. 5.1% b. 無 18.4% ＜有 35.7%	a. 44.8% b. 無 15.2% ＜有 27.7%	a. 16.2% b. 無 15.5% ＜有 37.1%	a. 22.7% b. 無 15.0% ＜有 26.5%
白糠	青年	a. 40.0% b. 無 = 有 11.1%	a. 30.4% b. 無 9.4% ＜有 14.3%	a. 60.4% b. 有 10.3% ＜無 10.5%	a. 38.8% b. 無 6.7% ＜有 15.8%	a. 20.8% b. 無 7.9% ＜有 20.0%
	壮年	a. 27.0% b. 無 30.4% ＜有 51.6%	b. 11.7% b. 無 36.3% ＜有 53.3%	a. 52.8% b. 無 25.0% ＜有 49.3%	a. 16.5% b. 無 29.7% ＜有 80.0%	a. 19.8% b. 無 29.1% ＜有 65.2%
	老年	a. 8.3% b. 無 33.3% ＜有 41.1%	a. 3.8% b. 無 34.7% ＜有 50.0%	a. 46.3% b. 無 22.0% ＜有 54.2%	a. 15.7% b. 無 25.4% ＜有 89.2%	a. 15.8% b. 無 26.3% ＜有 48.1%
むかわ	青年	a. 38.8% b. 無 26.9% ＜有 34.6%	a. 11.6% b. 無 27.9% ＜有 37.5%	a. 52.2% b. 無 21.3% ＜有 36.1%	a. 13.0% b. 有 22.2% ＜無 30.0%	a. 17.6% b. 無 28.6% ＜有 33.4%
	壮年	a. 34.9% b. 有 39.2% ＜無 59.0%	a. 8.5% b. 有 38.5% ＜無 52.1%	a. 58.4% b. 無 50.0% ＜有 52.8%	a. 15.1% b. 無 49.2% ＜有 63.6%	a. 24.8% b. 無 49.1% ＜有 60.0%
	老年	a. 10.6% b. 無 65.1% ＜有 73.9%	a. 3.6% b. 無 65.1% ＜有 87.5%	a. 48.7% b. 無 61.8% ＜有 72.2%	a. 18.3% b. 無 64.1% ＜有 80.0%	a. 25.4% b. 無 62.9% ＜有 71.8%

表7-10 交流の内容 交流「あり」と回答された上位2つ(3)

		個人としての文化への関心				
		a. 学校でアイヌの歴史学んだ b. 学んでいない	a. 学校で文化体験した b. 体験していない	a. アイヌ文化の知識ある b. 知識無	a. アイヌ文化に関する体験ある b. 体験ない	a. アイヌ文化に関する体験希望する b. 希望はない
新ひだか	青年	a. 職場, 学生 b. 職場, 近所/学生	a. 職場/学生, 近所 b. 職場, 近所/学生	a. 職場/学生, 近所 b. 職場, 近所/学生	a. 学生, 職場 b. 職場, 近所/学生	a. 職場, 近所/子ども/学生 b. 職場, 学生
	壮年	a. 職場, 学生 b. 近所, 職場	a. 学生, 子ども b. 近所, 職場	a. 職場, 近所 b. 職場, 近所	a. 近所/職場, 学生 b. 職場, 近所	a. 近所/職場, 学生 b. 職場, 近所
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 趣味, 近所/職場 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場/趣味 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場/趣味/学生 b. 近所, 職場
伊達	青年	a. 近所/職場/趣味, ー b. 学生, ー	a. 近所, ー b. 職場/趣味/学生, ー	a. 近所/職場, ー b. 趣味/学生, ー	a. 近所/職場, ー b. 趣味/学生, ー	a. 職場, ー b. 近所/趣味/学生, ー
	壮年	a. 職場, 近所/学生 b. 職場, 学生	a. 職場, 近所 b. 職場, 近所/学生	a. 職場, 近所 b. 職場, 学生	a. 職場, 趣味 b. 職場, 近所/学生	a. 職場, 趣味 b. 職場, 近所
	老年	a. 近所, 職場/趣味/学生 b. 近所, 職場	a. 近所/趣味, b. 近所, 職場	a. 近所, 職場/趣味 b. 近所, 職場	a. 近所, 子ども b. 近所, 職場	a. 近所, 趣味 b. 近所, 職場
白糠	青年	a. 近所, 職場/学生 b. 学生, 職場	a. 近所, 職場/学生 b. 学生, 職場	a. 近所/職場, 学生 b. 学生, ー	a. 近所/職場, 学生 b. 学生, ー	a. 近所/職場/学生, ー b. 学生, 近所/職場
	壮年	a. 職場, 近所/子ども/学生 b. 職場, 近所/学生	a. 子ども/学生, 近所/職場 b. 職場, 近所	a. 職場, 学生 b. 職場, 子ども	a. 学生, 近所/職場 b. 職場, 近所/学生	a. 近所, 職場/学生 b. 職場, 学生
	老年	a. 近所/趣味, 職場/学生 b. 近所, 職場	a. 趣味, 近所 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, 趣味 b. 近所, 職場
むかわ	青年	a. 職場, 近所 b. 職場/学生, 子ども	a. 近所, 趣味/子ども b. 職場, 学生	a. 職場, 学生 b. 近所/職場, 子ども	a. 近所/職場/趣味, 子ども b. 職場, 近所/子ども/学生	a. 近所, 職場/趣味/子ども b. 職場, 学生
	壮年	a. 職場, 近所 b. 近所, 職場	a. 職場, 近所 b. 近所, 職場	a. 職場, 近所 b. 近所, 職場	a. 職場, 子ども b. 近所, 職場	a. 職場, 近所 b. 近所, 職場
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所/職場, 趣味 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場	a. 近所, 趣味 b. 近所, 職場	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場

最初に、アイヌ文化に関する知識の有無から見ていこう。アイヌ文化に関する知識を得るには、各種メディアを活用したり、映画、演劇、音楽を鑑賞したりするなど、知識を獲得する過程には能動性が必要である。とすれば、知識の有無はアイヌ文化への関心の高さ、親しみの深さの表れであり、アイヌの人々との交流状況を左右することにもなる。各地域各世代の知識の有無を並べると、白糠の青年層が唯一6割台であることを除いては4地域のすべての世代が4割～5割台であり、およそ半数が知識をもっていると回答している。地域や世代による違いはそれほど大きくはない。学校教育に関しては、より若い世代ほどそれを享受している比率が高いが、学校以外の場においては、各世代がそれぞれに知識を得ていることが示された。

では、知識の有無と交流頻度の関係はどうなのだろうか。白糠の青年層を除くすべての地域のすべての世代において、「知識がある」者においては「知識がない」者に比して、交流有と回答する比率がより高くなっている。つまり、知識は交流を促す契機となり、一方で、交流が先行し、交流のなかで知識が獲得されるということが考えられる。ただし、「知識がある」者の交流の比率も「知識がない」者の交流の比率も青年層より壮年層、壮年層より老年層においてより高いことから、より年長の世代においては交流を持つことと知識を持つことの結びつきは強くないということになる。交流の内容は、交流有と回答された上位2つまでを取り出して見る限りは、知識の有無による違いは見当たらない。

2番目に、アイヌ文化に関する体験の有無という角度から交流のありようを見る。学校でのアイヌの文化体験のところで述べたように、体験とは五感に訴えかける類のものであるため、その記憶は直接身体に刻まれるという意味で知識より支配的なところがある。そのため、アイヌ文化に関する体験をしたかどうかを知ることは、アイヌの人々との交流に際して住民がいかなる受け入れ態勢でいたのかを推しはかるうえで重要と思われる。表7-9によると、体験有の数値は知識有よりは全体として低調である。「知識」を得る場合とは異なり、「体験」するためには、実際にその場に行き参加することが必要である。体験できる場が一回限りの公演、催事としてあるのか、定期的な事業としてあるのか、参加しやすい場として諸般整えられているのか、といった諸々の条件によって体験できる機会の多寡が限定されてしまうことによると考えられる。こうした外的条件に多くを規定されるなかで、「体験がある」者の比率が3世代そろって他より高い地域は見当たらず、世代が上がるにしたがって比率がより高くなる傾向も見られない。青年層については、6.4%（新ひだか）～38.8%（白糠）、壮年層については、11.1%（伊達）～16.5%（白糠）、老年層については、15.7%（白糠）～25.0%（新ひだか）となっており規則性は見出しがたいが、そのなかであって、白糠青年層の38.8%という数値が全地域全世代中最も高いことは先に述べたとおりである。

ここで、体験の有無という点から交流頻度を見るならば、むかわの青年層を除いては、「体験がある」者においてより多くの交流が行われており、体験があることとアイヌの人々と交流があることとの間に一定の関連があることがうかがわれる。その際、体験の有無による交流有の数値の較差を見るならば、アイヌ文化に関する「知識」の場合よりも「体験」の方が交流頻度に与える影響がより大きいことはたしかである。「体験」の方がより能動的な姿勢を必要とすることから、体験がある者の方がアイヌの人々との距離をより縮めることになり、そのことが交流をすることに結びつくということである。もちろん、体験があることは交流を促すひとつのきっかけをなすと同時に、交流がなされることによってより多くの体験が蓄積されるとも考えられよう。交流の内容を見ると、体験の有無にかかわらず「近所付き合い」「職場付き合い」が主流であるが、「体験がある」者においては交流有として回答されたものの上位2つとして「趣味の付き合い」がより多く回答されていることから、体験が付き合いの幅を広げている（あるいは多様な交流をすることから体験が広がる）ことは明らかといえる。それならば、アイヌ文化に関する体験そのものの有無ではなく、体験したいという積極的な意志の有無もまた交流の様相に影響しているのではないだろうか。

そこで、最後に、アイヌ文化に関する体験への希望の有無について見てみよう。まず、各地域の体験希望の有無を確認すると、新ひだかとむかわでは世代が高くなるにしたがって「希望がある」者の比率が上昇傾向、逆に、白糠では世代が高くなるにしたがってその比率は下降傾向、伊達では

3世代の比率がほぼ同列となっており、世代別の特徴を抽出することは難しい。とはいえ、この「希望がある」者の比率はすべて1割～2割台におさまっている。この体験希望の有無と交流状況を関わらせてみると、伊達の壮年層を除いては、4地域すべての世代で、「希望がある」者において交流頻度はより高く、アイヌ文化に関する体験への積極的な姿勢があるところにアイヌの人々とのより多くの交流が生まれ、あるいは、多くの交流をすることによって体験への興味関心が強まると見ることができる。交流内容は、体験の有無の場合とほぼ同様の傾向を示し、「希望がある」者においては、交流有と回答された上位2位までの交流として、「近所付き合い」「職場付き合い」に続いて「趣味の付き合い」があげられている点が指摘される。体験への「希望がある」者にとっては、近所付き合いや職場付き合いという日常生活のなかでの交流もさることながら、「趣味の付き合い」のようなより選好的で親密な交流が志向されることは十分にあり得ることであり、また、そうした選好的・親密な付き合いを重ねることが体験へのより強い興味や期待をひきだしていると考えることができる。

第4項 市民としてのアイヌ文化に関する意識

上で着目したのは、学校教育や個人的選好としてのアイヌ文化との関わりであった。本項で取り上げるのもやはり個人の関心のありようであるが、少し視点を変えて、アイヌ文化に関わる諸事への一市民としての意識（アイヌ文化保存への賛同意志の有無、白老の国立施設設置への賛否、アイヌ文化保存の主体についての考え方）のありように焦点を当てる。アイヌ文化保存への賛同意志の有無、白老の国立施設設置への賛否の2つはむかわ調査においてのみ設けられた質問であるため、全地域の比較とはならないが、アイヌの人々との交流への姿勢を探るうえで重要と思われるため、取り上げることとする（表7－11、表7－12）。

まず、アイヌ文化保存への賛同意志の有無に注目する。たしかに、個人の選好としてアイヌ文化に接近することと、アイヌの人々とより多くの交流が行われることの間には一定の関連があることが示された。しかし、自分の生活や興味関心というレベルを超えて、社会（地域社会、日本社会、国際社会等）としてこの文化を守る必要があると考えるかどうか、という点もまた交流の多寡や内容を左右すると考えられる。そこで、アイヌ文化保存に賛成するか否かを問うたところ、7割以上が賛成と回答しており、賛成する者の比率は世代が高くなるにしたがって順に高くなっている。各地の先住民族をめぐる諸問題が国際社会において取り上げられ議論されるようになり、そうした社会情勢を背景として、亡失の危機にある文化を保存することに対する責任感は意識されているという結果といえる。

では、この賛同意志の有無と交流状況を関わらせてみるとどうだろうか。壮年層と老年層においては、「賛同する」者において交流頻度がより高く、逆に、青年層では、「反対する」者における交流頻度の方が高い。すなわち、壮年層と老年層においては、「賛同する」意志を持つことがより多くの交流を促し、同時に、より多くの交流がなされることがアイヌ文化保存を積極的に進める意見を醸成すると推察されよう。このとき、青年層において「反対する」者の方がより多くの交流をしていることをどのように解釈すればよいのだろうか。後述のように、むかわの青年層においては、アイヌ文化保存の主体として「国」よりも「アイヌの人々」あるいは「地域」と回答する者における交流有の比率の方がより高い。したがって、この世代には、文化保存を当事者（アイヌの人々や

アイヌの人々が暮らす地域）に任せ、自分としては干渉しない、口を出さないとする者が少なからず存在すると考えることができる。交流の内容を見ると、「近所付き合い」「職場付き合い」を中心としてその他に「子どもを介した付き合い」「学生時代からの付き合い」などが散見されるが、賛同意志の違いによる一定の傾向を見出すことは難しい。

表 7-11 交流の多寡を規定する条件（4）

		市民としての文化への関心		
		a. アイヌ文化保存に賛成する b. 賛否×交流有	a. 白老の国立施設設置に賛成する b. 賛否×交流有	a. アイヌ文化保存の主体はアイヌの人々と考え b. 主体についての考え方の違い×交流有
新ひだか	青年	設問なし	設問なし	a. 29.6% b. 地域 22.2%＜その他 25.0%＜国 27.2%＜アイヌの人々 37.5%
	壮年	設問なし	設問なし	a. 26.9% b. 地域 44.6%＜アイヌの人々 61.7%＜その他 62.5%＜国 64.1%
	老年	設問なし	設問なし	a. 22.3% b. その他 14.3%＜アイヌの人々 65.2%, 国 65.2%＜地域 66.6%
伊達	青年	設問なし	設問なし	a. 19.0% b. アイヌの人々, その他 0.0%＜国 3.3%＜地域 9.4%
	壮年	設問なし	設問なし	a. 18.3% b. その他 0.0%＜アイヌの人々 11.1%＜国 11.6%＜地域 11.8%
	老年	設問なし	設問なし	a. 14.6% b. 地域 7.2%＜アイヌの人々 20.6%＜国 21.8%＜その他 23.1%
白糠	青年	設問なし	設問なし	a. 19.1% b. その他 0.0%＜国 6.3%＜アイヌの人々 11.1%＜地域 15.0%
	壮年	設問なし	設問なし	a. 22.0% b. 国 34.0%＜地域 40.5%＜その他 42.9%＜アイヌの人々 50.0%
	老年	設問なし	設問なし	a. 19.5% b. 地域 32.7%＜国 39.5%＜アイヌの人々 40.5%＜その他 60.0%
むかわ	青年	a.69.6% b.賛成27.1%＜反対33.3%	a.73.1% b.賛成26.5%＜反対27.8%	a. 32.4% b. その他 0.0%＜国 25.9%＜アイヌの人々 31.8%＜地域 35.2%
	壮年	a.75.6% b.反対44.7%＜賛成52.5%	a.81.8% b.賛成52.1%＜反対55.6%	a. 31.6% b. 地域 40.5%＜その他 50.0%＜アイヌの人々 53.1%＜国 56.7%
	老年	a.81.1% b.反対53.5%＜賛成70.7%	a.82.4% b.反対60.5%＜賛成69.1%	a. 26.1% b. 地域 50.0%＜その他 72.8%＜アイヌの人々 74.1%＜国 78.2%

* 伝統文化保存および白老の国立施設設置についての賛否：「賛成」とは「賛成」「やや賛成」の合計、「反対」とは「やや反対」と「反対」の合計とした。

表7-12 交流の内容 交流「あり」と回答された上位2つ(4)

		市民としての文化への関心		
		a. アイス文化保存に賛同する b. ある程度賛同する c. あまり賛同しない d. 全く賛同しない	a. 白老の国立施設設置に賛成する b. ある程度賛成する c. あまり賛成しない d. まったく賛成しない	a. アイス文化保存の主体はアイヌの人々と考え b. 主体は国と考え c. 主体は地域と考え d. その他
新ひだか	青年	設問なし	設問なし	a. 職場, 近所 b. 職場, 学生 c. 学生, 職場 d. 職場/子ども/学生, ー
	壮年	設問なし	設問なし	a. 職場, 学生 b. 近所, 職場 c. 職場, 学生 d. 趣味/学生, ー
	老年	設問なし	設問なし	a. 近所, 職場 b. 近所, 趣味 c. 近所, 職場 d. 近所/趣味/子ども, ー
伊達	青年	設問なし	設問なし	a. ー b. 近所/学生, ー c. 職場/趣味, ー d. ー
	壮年	設問なし	設問なし	a. 学生, 近所 b. 職場, 学生 c. 職場, 近所/趣味/子ども d. ー
	老年	設問なし	設問なし	a. 近所, 趣味 b. 近所, 職場 c. 近所/職場, 学生 d. 近所, ー
白糠	青年	設問なし	設問なし	a. 学生, ー b. ー c. 近所/職場/学生, ー d. ー
	壮年	設問なし	設問なし	a. 近所/職場/子ども, 学生 b. 職場, 近所 c. 職場, 学生 d. 職場, 近所
	老年	設問なし	設問なし	a. 近所/趣味, 職場 b. 近所, 趣味 c. 近所, 趣味 d. 近所/職場, 学生
むかわ	青年	a. 職場, 趣味/学生 b. 職場, 近所/子ども c. 子ども, 近所/職場/趣味/学生 d. 近所, 職場/学生	a. 職場, 趣味 b. 子ども, 近所/職場 c. 職場, 近所/趣味/子ども/学生 d. 近所/職場/学生, ー	a. 職場/子ども, 近所/学生 b. 職場/子ども, 近所/趣味 c. 職場, 近所 d. ー
	壮年	a. 職場, 近所 b. 職場, 近所 c. 近所, 職場 d. 近所, 子ども	a. 近所/職場, 学生 b. 職場, 近所 c. 近所, 職場/子ども d. 近所, ー	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場 c. 職場, 学生 d. 近所/子ども/学生, ー
	老年	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場 c. 近所/職場, 学生 d. 近所/子ども, 職場/学生	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場 c. 近所, 趣味 d. 近所, 職場/子ども/学生	a. 近所, 職場 b. 近所, 職場 c. 職場, 近所 d. 近所, 職場

ところで、白老の国立施設はアイヌ文化を保存するための施設であることから、この施設設置への賛否についても、アイヌ文化保存への賛同意志の場合と同様の結果が予想される。しかるに表7-11を確認するならば、「賛成する」者の比率は7～8割、世代が高くなるほどその数値は高くなる。交流頻度を見ると、「賛成する」者において交流有の比率がより高いのは老年層のみであり、青年層と壮年層では「反対する」者の交流有の比率の方がより高いという結果である。国立施設設置への賛否は政治的な意見の違いであり、賛成か反対かをもって市民としての意識の成熟度を判断することはできないが、老年層においては、国家が主導することを他世代に比して強く意識していることは明らかである。交流内容について見ると、施設設置への賛否の別による特徴を認めることはできない。では、このように市民としての意識の水準に落差があるなかで、人々はアイヌ文化保存を誰（どこ）が中心となって実現していくべきと考えているのだろうか。

最後に、アイヌ文化保存の主体についての考え方という点から交流状況を整理する。この質問は4地域の調査すべてにおいて用意されたものである。問題になっているのがアイヌ文化である以上、当事者であるアイヌの人々が中心となるべきという考え方がまず成り立つ。そこで、主体は「アイヌの人々」という考え方に関して4地域の各世代を見比べると、交流有の比率が高い新ひだかともかわにおいては2割台～3割台、次いで比率が高い白糠では2割前後、4地域のなかでは最も交流有の比率が低い伊達では2割未満である。アイヌの人々とのより多くの交流がおこなわれている地域ということは、アイヌの人々の存在感が強いということであり、アイヌの人々の主体性を尊重しようという考え方がより強調されるということかもしれない。さらに世代毎の特徴の有無を探ると、アイヌ文化保存の主体を「アイヌの人々と考える」者の比率は、白糠を除く3地域においては青年層において最も高く、世代が上がるにしたがって次第に低下している。このことは、若い世代では当事者の問題として理解される傾向がより強く、世代が高くなると、当事者だけでは立ち行かない問題であるとの認識が強まるということである。

ここで、文化保存の主体についての考え方の違いによる交流有の比率を見ると、新ひだかの青年層と白糠の壮年層を除いては、「アイヌの人々と考える」者において交流有の比率が他よりも高いということにはなっていないことに気づくだろう。アイヌ文化保存の主体についての考え方に関しては、考え方が交流を規定するというよりは、むしろ逆であって、アイヌの人々との交流のなかで、文化保存の主体についての考え方が個別に固まってきたと考える方がわかりやすい。アイヌの人々との交流を他2世代に比して多くおこなっている老年層において、文化保存の主体を地域あるいは国あるいはそれ以外のものと回答する者における交流有の比率が相対的に高いのは、アイヌの人々を知るからこそ彼ら自身の力だけでは文化保存が難しい現実を主張するものと考えられる。交流内容に関しては、アイヌ文化保存の主体についての考え方の違いによる違いや、地域や世代による違いを見出すには至らない。

第4節 親密な交流としての結婚

最後に、再びインタビューデータ（新ひだか、伊達、白糠）を用いて、アイヌの人々との結婚をめぐる地域住民の考え方や思いに関して見直していく。結婚とは、きわめて私的な関係性であると同時に、法律によって認められた公的な関係性でもある。現代における配偶者選びは当事者の意志によるものとされ、その意味では個人の自由な選択の結果であるが、それでもなお、結婚は家族や

親族にとっての一大事という側面を有している。というのも、結婚は一生続くことを前提とした関係であり、子どもの誕生も想定される以上、自由な選択でありつつも、当事者が属する社会や集団が容認するものであることが期待されるからである。とすれば、そこには建前と本音が見られるのではないだろうか。

第1項 アイヌの人々との距離感

アイヌの人々との結婚がどの程度現実的な問題として受けとめられているかどうかは、自分が暮らす地域で和人とアイヌの人々との交流が日常的にどのくらい行われているかによって異なってくると思われる。そこで、各地域における交流有を再度確認すると（表7-1）、新ひだかでは、青年層 29.4%、壮年層 56.9%、老年層 62.8%、伊達では、青年層 4.7%、壮年層 10.8%、老年層 19.8%、白糠では、青年層 10.2%、壮年層 38.9%、老年層 35.4%となっており、この3地域のなかでは新ひだかの交流頻度が突出して高い。つまり、新ひだかにおいては、アイヌの人々との結婚問題は他2地域に増してより現実的な問題としてとらえられていると考えられる。逆に、日頃自分の生活圏においてアイヌの人々と行き会う頻度がより低ければ、和人とアイヌの結婚の話題をきく機会もより少なく、自分自身の問題としてそれほど具体的にとらえられることはないだろう。

そこで、これら3地域について結婚をめぐる特徴的な発言をまとめてみると（表7-13）、新ひだかの住民には「アイヌ差別が依然存在するから」「アイヌとわかる特徴をもった子どもは差別されるから」という理由をあげて結婚を望まないとはっきりと語る者が目立ち、一方、伊達では、そこまで直截的な態度が表明されることはないという違いがある。さらに白糠の住民について見るなら、アイヌとの結婚を、自分の家族の利害に関わる重大な事案として認識するのでもなく、といって、無視するわけでもなく、理性的そして分析的に考えられているという特徴が見出せる。つまり、予想に違わず、アイヌの人々との結婚が十分に想定される場合には自己の利害関係に敏感なとらえ方になり、一方、そうした事態に直面する可能性が低いとの認識がある場合には現実的な問題としての反応は鈍くなり、少し距離をおいた客観的なとらえ方になると考えられる。

第2項 ダブルスタンダード

さて、上記のような地域毎の特徴はあるものの、3地域には大きな共通点がある。それは、結婚をめぐるダブルスタンダードの存在である。すなわち、「一般論」としては、和人とアイヌの結婚を否定することはなく、アイヌの人々を特別視する気持ちはないと述べたり、あるいは無関心寄りの態度を示したりする一方で、「身内の結婚を想定した場合」は、アイヌとの結婚への不安をあげ、アイヌの人々に対する忌避感情が消えない、というものである。このダブルスタンダードは青年層・壮年層よりも老年層においてより強く見出される。その理由として次のようなことがあげられよう。1つ目は、老年層の多くは既婚者であり、一般的な意味での結婚生活の難しさを知っていること、2つ目は、老年層はその人生経験において和人とアイヌの結婚の実例とその結婚をめぐる周囲の反応（とくに、好意的ではない反応）を見知っていること、3つ目は、老年層は身内の若者（子や孫）が結婚して幸せで安穏な家族生活をおくことを強く願っており、身内の年長者としてその結婚に一定の責任があると考えていること、である。対する青年層においては未婚者も相対的に多く、自身の結婚についてまだ具体的なイメージがもてない者もいるであろうし、既に見てきたように、学

校教育やメディアなどを通してアイヌの歴史や文化に触れる経験を相対的に多く得ていること、多様な結婚のありようを当然視するようになってきていることなどから、老年層のような警戒心を持つ者は相対的に少ないものと考えられる。

それでは、このダブルスタンダードを具体的に見ていこう。住民は、基本的には、個人の自由な選択としての結婚という考え方については、これを尊重し受け入れている。アイヌの人々との結婚をあからさまに貶めるような発言は見られない。インタビュー全体のなかで、住民はアイヌの人々について「顔はやっぱり普通の人とは違う」（新ひだか・老年女性）などと述べ、彫りが深いといった特徴を「違い＝違和感」としてあげている。しかし、時には、アイヌ女性の容貌の美しさを羨望したり、アイヌと和人の夫婦から生まれる子どもの可愛らしさをほめたりもしている。「ものすごくきれいな人だった。アイヌはきれいな人が多い」（新ひだか・老年男性）、「アイヌの女性はきれい」（伊達・老年女性）、「子どもたちも混ざっているのかかわいい顔をしている」（伊達・老年女性）、「目鼻立ち、顔立ちがはっきりしていて、顔つきが和人とは違うので、アイヌの血が多少入っていればわかった。女の子だときれいな子が多かった」（伊達・老年男性）といった発言である。「ほめる」とは場合によっては「敬遠する」、つまり「遠ざける」ことでもあるため、容貌をほめる言葉を、アイヌと和人の違いが強く意識されている発言と解釈することもできるかもしれない。とはいえ、ここでは、ある種の距離感がありながらも、「一般論」としては結婚を否定するには至っていない。

ところが、結婚問題がこと身内の結婚の話となると、彼らの態度は用心深くなる。正論を述べる余裕を失うといえはよいだろうか。これまでの社会においてアイヌの人々に与えられてきた位置づけを考えるならば、和人にとって、彼らとの結婚は「憧れ」というよりは、その逆の意味でとらえられることも多かった（多い）だろう。つまり、彼らの心に引っ掛かっていた（いる）のは、結婚によって自分の家族が差別される側になってしまう（かもしれない）ことへの恐れである。「一般論」としての結婚が語られる際は和人との「違い」が強調されることにとどまるとしても、身内の結婚について語られるときは「違いを意識すること」が即座に「否定すること」へとつながっていきやすいのはこうした理由によるものと推察される。このように、自分の身内の結婚に関して発せられる否定的な言葉には、アイヌの人々を下に見る差別的な本音を見てとることができる。

では、人々は結婚によってどのような不利益を被ることを恐れるのだろうか。発言の具体的内容を見ると、それは外見に関わるこだわりとして語られている。「見た目が100%アイヌだなとわかったら、「ここから出ていきなさい」と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね」（新ひだか・老年男性）といった発言には、特徴的な容貌が目立つことへの恐れが表れている。とくに、和人とアイヌの結婚によって誕生する子どもの外見に関する不安は大きい。なぜなら、それは、その結婚の影響が世代を経て継承される可能性を意味するからである。「あのね、やっぱり見ているとだんだん出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然かわらないかな、可愛いなと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、年が経つとなんとなく出てくるもね」（新ひだか・老年女性）、「したから、どっちかにいくかわからないから。1番目の子どもはわからないけれど、2番目3番目になったら、はっきり」（新ひだか・老年男性）、「外見だと変な話、2世3世になると、女の人には美人だなと。でもルーツを辿っていくとそこに行くんだよな、というような根深い部分があって」（白糠・老年男性）、「でも、子どもにやっぱり出るっていうのがあるから、ひょっとしたら反対す…ちょっと、ちょっとは

言うかもしれないですね」(白糠・老年女性)という言葉をあげることができるだろう。ここからわかることは、今の時点では、彼らにとって問題なのは、血の濃さよりも外見的な特徴の濃さであるという事実である。その外見上の特徴が美しさとして表れるとしても、それが自分の家族の安寧を乱すなら歓迎されない。彼らのなかでは、アイヌの人々に見られる容貌的特徴が、どの子どもにも同じように現れるわけではないことや大人になってから目立ってくる場合もあることが経験的な知識として共有されており、先が読めない不安として意識されている。これらの発言を見ると、外見的な特徴は一目瞭然である(隠せない)以上、子どもがそのために差別的な扱いをされる可能性があると考えるなら、結婚させたくないという結論に至ることは十分に想像できることである。

このダブルスタンダードは、生まれ育つ過程においていつの間にか埋め込まれた価値観であるために、それが認識されないことも多いと考えられる。あるいは、薄々気づいているとしても、それ以上考えないように蓋をしてしまっている者もいるだろう。例をあげるなら、アイヌとの結婚について問われたときに、「考えたことがない」「何とも言えない」という言葉がよく聞かれることも、本当に考えたことがない場合と、この問いが持つ重さを知っているために正直な答えを言いよんでいる場合があると解釈できる。しかしながら、住民のなかには、自身の建前と本音の矛盾に関して自覚的な者もいることを指摘しておきたい。たとえば、白糠の老年層のある者は、和人とアイヌの人々の間に乗り越えがたい壁があることを認め、その「壁」をどうすることもできない自分の弱さを再認識している。自省的な語りとしては、「それだけ根深いものがあるんだよね。人間の生きている中で、淵というものがあるじゃない。表面はなだらかなんだけど、どこかに深みみたいなのがあって、あるじゃない。そこにあたらなかったらそのまま行けるんだけど、見なくて済んだらいいのに、見ちゃうと真実が分かっちゃう」(白糠・老年男性)、「わが事として考えたらどうなんだろう。やっぱり美しいことは言っていられないんじゃないかね。なぜなんだろうっていうことは言うかもしれないよね。でも徹底的に反対はもうどうしようもないと思うよね。最後は許すと思うけど、やっぱり紆余曲折はあるんじゃないかなという気はするよね。冷静に物は見れないかもしれない」(白糠・老年男性)といった言葉がある。このように自分のものの見方を客観的にとらえる眼は、これまでの老年層においては経験の蓄積のなかから獲得されたものであったと思われる。

表7-13 結婚をめぐる建前と本音

新ひだか	青年	◆全然気にしないですね。（男性）
	壮年	◆いや。死んだ親父よく言っていたな。アイヌの女の人のことをメノコというのだけれど、死んだ親父に「メノコでもいいから再婚するように」と言われた。メノコでもいいから、差別的なことだよな。心の中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設問で仲良くしてましたというけれど、普通仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親爺にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよな。…アイヌの女性が、この子良い子なのになかなか貰い手ないね、かわいそうだよなというのはあったよね。そういう人はやっぱり本州出身の人と結婚するね。（男性） ◆母は私達にお友達を連れて行っても何も言わなかったけど、結婚する時にはちょっと考えてと言われた。母ってあまり差別のない人だから、そういうことを言わない人なんですけれども、それはちょっと言われましたね。多分いろいろ差別されていたり、見ているんじゃないでしょうか。（娘の結婚については）私は別に多分、親は見させてもらいますけど、それは誰を連れてきても多分同じだと思います。でも、そんなんでは。うち、夫もおまえが連れて来た人ならだれでもいいというほうなので。私達がだめだと言っても、多分好きなら一緒になるし、それでもって反対した後に、お父さんとお母さんが反対したから、私達こうなった、別れるとか別れないとか言われるようになった時にそうなったと言われるのもいやだし。選ぶのは娘だと思っているし。そういう意味では誰を連れてきても。でも相手の親はちゃんと見させていただきます。（女性）
	老年	◆〇〇にいる時からアイヌについては知っていた。結婚する時にアイヌかどうかは気にしていた。アイヌとはやばいな、結婚してはいけないという気持ちはあった。でもつきあったことはある。ものすごくきれいな人だった。アイヌはきれいな人が多い。全然わからない。あれ、と思うくらいきれい。アイヌかなとは思えない人だった。アイヌの人と結婚しようとは思わなかった。…アイヌの人に関しては友達だったら全然気にしない。別に何ということもないし一緒に遊んでいても違和感はない。…結婚だけは。親も結婚はアイヌはやめたほうがいいんじゃないかなと言ったかもしれないし、言っていないかな・・・はっきりしていない。でも俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけれど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった。友達付き合いはいますよ。…娘がアイヌの友達を連れてきてもなんとも思わないが、結婚すると言ったらちょっと待ってくれやとなる。娘は離婚したが、離婚した相手の兄弟がアイヌと結婚している。別れていなければ親戚になるよね。むこうで親は反対したらしい。それは気にはなるけれど、でも一緒になったら仕方ないね。今からうちの娘が再婚すると言って、見た目が100%アイヌだなとわかったら、「ここから出て行きなさい」と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね。両親がアイヌだったらやっぱりやめておけと言うだろうね。（男性） ◆アイヌの人みんなシャモの奥さんもらうんだよ。シャモの人でもらっている人もいるけど。男も女もそうかもしれないけど、アイヌの人はシャモの人にくっつきたいんだわ。どうしてなのかな。俺の弟だってね。弟の嫁さんアイヌなんだよ。もうくっつきたくて、みんなそれは駄目だと言うわな。反対というよりも、そんなの誰も相手にしなかったわな。知らない間にそうやって、くっついてしまっているから。もちろん、そういう結婚式挙げるわけでもないし。俺らもあんまりわからなかったけど。アイヌの人って、しつこくね、やっぱりシャモの人がいいのか、しつこく来て来て、そして一緒になったんでないか。俺はあんまりわからないけど、聞きもしないけど。（弟の妻について）くっついたもの。アイヌだからって差別していないよ。普通に。…今はもうたいしてアイヌってね。あんまり今は差別ないんじゃない。（男性） ◆やっぱり、一緒にはさせたくないね。子ども。子どもは結婚しているから、孫だね。あのね、やっぱり見ているとだんだん出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然わからないかな、可愛いなと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、年が経つとなんとなく出てくるもね。性格じゃなくて、顔。顔はやっぱり普通の人とは違う。でもね、最近私はそういう人達と交流もあって、性格はいいよ。お母さんたちはいいよ。その、子どもさ。だから、これから子どもたちはもう結婚しているけれど。孫がもしアイヌの人を連れてきてもどうだろうね。一緒にさせるかな・ちょっと悩むかな。私もうだいたい昔から見ているからね。けっこう交流もあって。やっぱり結婚となったら。普通の交際とかは全然関係ないよ。だけど、結婚となったらちょっと考える。（女性） ◆偏見でみるということはないよね。私達より上の人は結婚する時にはちょっと言う人はいましたけれども。今はそんなに。何もないね。うちら和人でしょ、だから、両方の親は何も言わなかったし。…（俺らの友達で、いたんだ。だけどその人もアイヌと思わないで結婚しているけれど、子ども1人しかつくらなかった。男の子は何ぼか見れば、（アイヌ）かなってわかるけど。したから、どっちかにいくかわからないから。1番目の子どもはわからないけれど、2番目3番目になったら、はっきり。どっちかにふられるらしい。…夫）（女性）

伊達	青年	◆結婚や恋愛の時に民族性で差別することは好きではない。日本では同性愛についての差別もあるが、恋愛はいつ、どのタイミングで、だれを好きになるかはわからない。たまたま好きになった人が外国人や他の民族の人だったとしたら、それは自由なので、それを侵害する権利はだれにもない。（男性） ◆結婚・恋愛における民族性については、アイヌの方ともし結婚することになったら嫌だとか、恋愛をする時に相手がアイヌであるかどうかを考えるということにはなかった。好きな人がアイヌでも気にしなかったと思う。今まであまり区別したり、意識したりしたことがなかった。まわりにアイヌの人がいたかどうかというのも記憶にない。この調査で考えるまで気にしたことがなかった。小学校の時（静内）にアイヌの子がいたなという記憶があるくらいで、日常生活のなかでアイヌかどうかということは気にしたことがない。（女性）
	壮年	◆結婚や恋愛の際の民族性について、経験がないから何とも言えないが、仮に結婚相手がアイヌ民族だったとしても、縁があったのなら結婚したと思う。子どもがアイヌの人と恋愛関係になっても、それは本人の意思なので自分は全然気にしない。（男性）
	老年	◆恋愛や結婚する時にこの辺りではアイヌの血筋を考慮することはないし、自分も考えたことはなかった。同級生にアイヌの血筋の奥さんをもらった人がある。親の世代など、古い世代の人はアイヌとの結婚を嫌がるというのを聞いたことがある。その同級生も親には反対されたいが、奥さんは子育てもして家も守っているし、今は一緒になってよかったのだと思う。かつてはアイヌとの結婚に反対する人がいたが、今そういう人はいない。中身ははっきりわからないが、そういう差別はほとんどなくなっていると思う。今はもう3世代くらい経っているから、ほとんど和んだ、アイヌだという感覚はなくなってきていると思う。（男性） ◆結婚や恋愛において、民族性については身近にアイヌがおらず対象になることもなかったもので、考えたことはない。…子どもたちは結婚をしているが、子どもたちの結婚についても、相手がアイヌということもなかったし、身近にもいなかったのでも考えたことはない。たとえばアイヌじゃなかったって、外国人だったとしても、結婚相手として本人がいたいと思って連れて来たとしたら、結局事後承諾になるから、本心では偏見があったとしても尊重しなければならないと思う。そういうことはなかったからわからないけれど、口には出さなくても、日本人の親として子に対して思うことは胸のうちでは多々あるかもしれない。（男性） ◆祖母は叔母（母の妹）がアイヌ人と結婚することに反対し、差別していた。結婚相手は営林署につとめているちゃんとした人なのに祖母が反対していたのを子ども心に覚えている。自分の母たち兄弟は反対したり、差別したりすることはなかったが、祖母はうるさかった。アイヌの〇〇さんのところの娘たちはみんな普通のひとと結婚した。（女性） ◆友だちの妹が豊浦にいて、アイヌの人と結婚する時に親が大反対した。友だちである姉が妹の親代わりになって結婚させた。何年もたって、友だち自身の娘が結婚する時に、相手がアイヌの人だった。友だちは親の反対を押しきって、妹をアイヌの人と結婚させたから、「まわりまわって罰があたったのかな」と言ったことがあった。今は妹さんも両親と会ってうまくいっている。娘さんの方もうまくいっている。友だちも妹の結婚の時は反対しなかったが、自分の娘となると複雑だったようだ。父親は絶対反対だったが、友だちである母親は孫が生まれると自然に折れて和解した。豊浦の町では深刻な問題のようだ。自分の娘がそうだったら、どうなのかというわからない。一般的な話と自分の話となると別かもしれない。いざ結婚になると大変だということは見ている。現実にはそういう話はある。この話以外には結婚について聞いたことがない。隠しているかどうかは別として知っている限りではない。（女性）
白糠	青年	◆全然気にしないですね。それどころか周りすらもだからどうしたみたいな感じじゃない？だから、差別的なものが自分の習慣でないから。（男性） ◆いや、それはなかった、特にアイヌがとかっていうことはないし、確実にうちの親もそういう人じゃないので。（女性）
	壮年	◆いやあ、なかったね。気にしなかったね。嫁も元々、白糠の地元の人だから、それでも特にはなかったな。（男性）
	老年	◆いま白糠でアイヌ差別というのは、私はそれほどひどいものはないと思っています。職業の差別もないし、結婚の差別もよそから比べたらそんなないと思います。…（民族性を気にすることは）ないです。うちの家内もそういうものはなかった。ところがウタリ福祉をやってから、そういうものを意識するようになった。それだけ根深いものがあるんだよね。人間の生きている中で、淵というものがあるじゃない。表面はなだらかなんだけど、どこかに深みみたいなのがあって、あるじゃない。そこにあたらなかったらそのまま行けるんだけど、見なくて済んだらいいのに、見ちゃうと真実が分かっちゃう。そういう、うまく言えないけど、ウタリ福祉をやってよかったというのは、自分としては差別というのは、これは仕方ない。これは最初に言ったように自分とは異なる人たちがいるんだということ。それを受け入れることが出来るかどうかということ。（男性） ◆触れることがタブーというのが植えつけられたことがあったと思うのですよ、子どもの時から。さっきも言ったように、僕の姪っ子が結婚した血筋にアイヌの人がいて結婚すると聞いた時に「誰と？」と頭によぎるのがそれなんだよね。きっと僕らの年代ですよ、今の人はどうか分からないけど。それはきっと、だからって反対とかどうのこうのじゃなくて、

	頭の中に1番それが気になる部分。でもそれは口に出して「本家筋にアイヌだろう」とかそこまで露骨に言うことはないと思うけど、どこかでみんな我々の年代以上の人たちは特にそれを感じるのかも分からないですね。…結婚もそうだろうし、避けて通れるものだったら避けてくれたほうがいいという思いが、未だにどこかにあると思いますね。だからすごい根深いと思うんだよね。何があったのか。外見だと変な話、2世3世になると、女の人は美人だなど。でもルーツを辿って行くとそこに行くんだよね、というような根深い部分があって、それが何を気にしているのか分からないけど、日常生活の中で未だに我々の年代でもどこかでありますよね、アイヌ民族に対して。（男性） ◆こんな意識ないね。ま、こういう環境にもなかったからね。好きになったらするわね、うん。好きになったら、多分してるでしょ。…ただ、好きになったら、そうだね。これはさ、見合いだのなんだのっていうことになったら考えるだろうね。それは何故考えるかって言ったら、僕は見合いと結婚とは違うと思ってるから。見合いと恋愛とはね。結婚はね、これは半分気の迷いも入ってるんだ。だから、その気の迷いが入ってるけれども、恋愛してる時はね、この気の迷いも気が付かないんだね。だけど、見合いになったら多分この気の迷いに気が付くことが多いんじゃないか。それで、考えて調べてみたらこの女性アイヌだったと…そしたら、アイヌに対するその感覚というものが又新しく出てくるんじゃない？そこで、知らないなりにそのアイヌという考え方に…何ちゅうかな…反論してくるんじゃないかな。うん。知っていて恋愛するのと見合いで知らされるのとは違うと思うんだよね。（男性） ◆これね、難しいよね。要するに自分の今の立場でものを言うと、そういうようなことを要するにアイヌというひとつのくくりの部分があって、そういうのが別に差別するわけじゃないけど、やっぱり兩人の仲が一番だよっていうことだとは思っているけども、これが自分の子どもとなれば、本当に冷静にそういうことを言えるんだろうかっていうことは、これは事実だよ。2人ともそういうような方面の方々とは一緒にはならなかったんだけど、娘の折なんだけど、娘がイギリスにちょっと行ってたんだけど、そのときに黒人、黒人っていったらあれだけど、黒人と一緒になったらどうしようかって話になったことがあったんだけどね。自分の立場だったら一概にはやっぱり今言えないよね。…わが事として考えたらどうなんだろう。やっぱり美しいことは言っていられないんじゃないかね。なぜなんだろうっていうことは言うかもしれないよね。でも徹底的に反対はもうどうしようもないと思うよね。最後は許すと思うけど、やっぱり紆余曲折はあるんじゃないかなという気はするよね。冷静に物は見れないかもしれない。（男性） ◆ああ、やっぱり、そんなこと言ったら悪いんだけど、ああ、ちょっと違うかなっていうのはありますよね。でも、やっぱりそういうことを口に出しちゃいけないと思うんで。…息子2人ですけども、もしお嫁さんにそういう人を選んだら、でも、息子が選んだんだったら反対しない、でも、子どもにやっぱり出るっていうのがあるから、ひよっとしたら反対す…ちょっと、ちょっとは言うかもしんないですね。一度ぐらい、ちょっと言ってみせる、それでもしたいって言うんだしたら、もうそれは本人の人生だから、最終的には本人の意志だからね、本人に任せるしかないんじゃないかな。（女性）
--	---

おわりに

ここまで、地域住民がアイヌの人々とどのような交流をしているのかを見てきた。最後に、地域毎の特徴および地域を超えて共通する状況について簡単にまとめ、接触・交流と社会関係に関わる先住民政策への示唆を探る。

まず、地域毎の特徴を確認しよう。アイヌ多住地域ではない大都市圏札幌における交流頻度の値が最も低かったことはある意味当然の結果といえるが、アイヌ多住地域のなかで各地域はどのような特徴をもっていたのだろうか。4地域のなかでより多くの交流が行われていたのは新ひだかともかわであった。新ひだかにおいては、和人住民にとってのアイヌの人々との交流は日常生活を構成するひとつのピースであり、排除したり遠ざけたりするものではない（できるものではない）という実態があり、住民もまたそのように認識していたと見ることができる。同じ地域で生まれ育ち、同じ学校に通い、その後も同じ地域に長く暮らし、場合によっては世代を経て関係が続くところに、より継続的でより緊密な交流が生まれる基盤があったことはたしかである。近い関係が其処ここにあるだけにアイヌの人々との結婚は想定外のことでなく、アイヌ差別の対象となりたくない（させたくない）、アイヌとわかる容貌の子どもを持ちたくない（持たせたくない）という自己防衛的

な態度が認められた。新ひだかと並んで多くの交流が行われてきたむかわの場合、生活史や結婚意識については未調査であるため不明であるが、その他の諸点に関しては新ひだかとほぼ同様のことがいえる。

では、新ひだかとむかわを分かťものは何なのだろうか。調査結果を整理するなかで印象的であったことは、アイヌの文化や歴史に関する「教育」を受け「体験」を持つことと交流することとの関わりようが、新ひだかとむかわでは若干異なっていたことである。すなわち、新ひだかにおいては「教育」や「体験」、つまり、学校においてアイヌの歴史を学ぶことやアイヌの文化を体験することが、全世代において、より豊かな交流に結びついているのに対して、むかわ（壮年層）ではそうではなかった。また、学校内外でのアイヌ文化に関する体験に関しても、新ひだかでは、全世代において、体験があることとより多くの交流があることの間に一定の関連が見出せるのに対して、むかわ（青年層）に関しては関連が見いだせないという結果であった。

さて、この2地域に次ぐ交流頻度の高さを示していたのが白糠、その次が伊達である。新ひだかにおける生活史と比較すると、白糠と伊達における住民とアイヌの人々との距離は相対的に遠く、彼らの存在を十分に意識しながらも深く関わることのないままに日常が進行するというのが現実であった。地元生まれ・育ちの比率も新ひだかやむかわより低く、子どもの頃の生活でも学校生活でも、当事者として彼らと付き合うというよりは、彼らの存在をひとつの風景として認識していたところに特徴があるといえよう。日常生活のなかでアイヌの人々と継続的に関わるのが少ないため、当然のことながら、学校時代の付き合いをも含めた近所付き合いのネットワークも成立し難い。つまり、付き合いといえば仕事上のものが中心となるため、それが仕事を離れての継続的な交流までは育たないことも多かった。白糠と伊達を比較すると、伊達においては、アイヌの人々に対する心理的な距離が白糠以上であり、より無関心ともいえる状況がうかがわれた。したがって、結婚をめぐる意識についても、白糠では、自分の家族の利害に関わる問題としてとらえるまではいかないものの客観的に分析しようとする態度がある一方で、伊達においてこの問題はさらに他人事であり、一般論として語られるにとどまる傾向が強かった。

この2地域に関しても、アイヌの歴史や文化を知ったり体験したりすることが基本的には交流有の数値の高さと関連しているという結果であったが、白糠（青年層）では、学校でのアイヌ文化の体験有、アイヌ文化についての知識有、アイヌ文化に関する体験有に関して全地域全世代中最高値を示していたにもかかわらず、そのことが交流に必ずしも結びついていなかったことが指摘される。

ここまで、地域の特徴に視点をすえて見てきたが、以下では、地域を超えて共通する状況を提示したうえで、今後、和人とアイヌの人々の交流がより豊かなものになっていくために何が必要かを考える。本節を振り返るに、生活史そして現在の生活において、アイヌの人々との交流の担い手は壮年層と老年層、とりわけ老年層であった。それはすべての地域に共通していた。老年層の交流スタイルとは、仕事や近隣での偶然の出会いに始まる付き合いを発展させ継続するという形のものが主流であり、自ら求めて実践される選好的な交流としての部分は少なかった。彼らはアイヌの歴史や文化を知るための教育を受ける機会に乏しかったが、経験の蓄積のなかでアイヌの人々との付き合いの流儀を獲得してきたのである。一方、青年層における交流は3世代の中で最も低調であった。彼らは、人生経験は乏しいものの、年長世代に比して学校教育のなかでより充実したアイヌ文化学習をしてきている。にもかかわらず、それが交流増に直結しているわけではなかった。

ここで、先住民政策への示唆を探るならば、偶然の機会を活かすだけでなく選好的な交流が積極的に行われるようにしていくこと、とくに若い世代においてこうした交流を増やしていくことがポイントとなると考えられる。そのためには、やはり「教育」の充実が必要となろう。この場合の教育とは学校教育だけでなく、社会教育、生涯学習等広い範囲のものをいう。もちろん、それらの「教育」は地域の諸事情に合わせた形のものでなければならないが、共通項として考えるべきは、さしあたり、2点ある。1つは、学校教育はじめ多様な教育の媒体を活用して、アイヌの問題を地域の歴史として学ぶだけではなく（それも無論重要ではあるけれども）、国際社会が抱える様々な先住民民族問題のひとつとして学んでいくことである。それによって、自分の立ち位置を相対化することができるようになる。こういった問題をタブー視するのではなく、ただ情緒的に反応するのでもなく、議論していくためにはやはり知的な基盤がないと難しい³⁾。もう1つは、学校教育その他の機会においてアイヌの文化や歴史を学び体験することが交流につながるようなプログラムをつくることである。学びと体験が交流を促し、交流することが知識と体験への関心を深めるという循環を支えることのできる教育が待たれる。

そのような教育がなされれば、結婚をめぐるダブルスタンダードの存在についても気づかざるをえないだろう。住民たちが配偶者となる人間や生まれてくる子どもの外見的な特徴について語っていたのはすでに見たとおりである。では、外見的特徴が薄ければ、あるいは、まったく特徴が認められなければ、アイヌの血筋であることは問題にならないのだろうか。和人と見わけがつかないけれどもアイヌの血筋であることが判った場合、人々はどう反応するのだろうか。子孫のどこかの代でその外見的な特徴が出現することを恐れる気持ちが生まれるのだろうか。外見的特徴以外に自分とアイヌの人々を隔てる別の理由を見つけようとするのだろうか。血筋のことを周囲に隠そうとするのだろうか。このダブルスタンダードがその中身を変容させながら、どのような形で浸透し続けるのか、あるいは消えていくのか、注目していく必要がある。と同時に、重要なことは、人々がこうした自身の価値観を相対化する力を獲得することである。多文化・多民族教育のなかで、アイヌに限らず様々な民族について学び、その生活や文化について知るなかで、自分の地域の問題へのより深い関心が育ち、アイヌの人々との交流へのより積極的な取り組み姿勢が育つような教育こそが求められているといえる。

注

- 1) 札幌の住民において、自治会活動に「積極的に参加している」比率は、青年層 0.8%、壮年層 2.7%、老年層 6.8%である。
- 2) たとえば、「やっぱり北海道だけじゃないでしょうけどアイヌの人がたね。やっぱり先住民族だからね。北海道で言うとさ。和人なんかあとからきて、ぶんどっちゃったみたいところが結構あるわけでね、物の本なんか読んでみますとね」（新ひだか・老年男性）という言葉がある。アイヌの歴史を多少とも知っていること、すなわち、この地がアイヌの人々にとっては先祖代々の土地であるという認識があることによって、和人を優位におこうとする考え方について抑制的になっている部分があると考えられるだろう。
- 3) 学校の教員がアイヌ文化を学ぶ機会の確保も重要な課題である。たとえば、白糠町では、1997年より小学校において「ふるさと教育」を行ってきた。そのなかでアイヌ文化学習に取り組む

学校が現れ、2008 年以降、町内の全校にアイヌ文化学習が広まった。この取り組みに関わって、新しく赴任した教員（その他、町役場の新人も）を対象として、アイヌの石碑など町内の教育関係施設をまわる機会を設けているとのことである。ただ、校内研修をするまでは至らず、教員は、アイヌ文化学習を担いながら自身も学んでいくという形になっている（2015 年 2 月 23-24 日 白糠補足調査における白糠町教育委員会や小・中学校校長へのインタビューより）。「出前講座」のようにアイヌの人々やアイヌ文化に詳しい人々を招いて学ぶことも重要ではあるが、教師自身の力量を高めるためのプログラムの充実が求められよう。

参考文献

- 小内透編著, 2013, 『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室。
- , 2014, 『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室。
- , 2015a, 『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室。
- , 2015b, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その 4 地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係——2014 年アイヌ民族多住地域住民調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

(小野寺理佳)